



月の光を
纏う者

2



月の光を
纏う者

2

気持ち程度に舗装された裏街道。

石畳を逸れ、草地へ入った木陰に車を停めてエアニス達は休憩をしていた。既に日が傾き始めている。当初の予定では日が沈む前に港街へ到着する予定だったが、このままでは間に合いそうにない。

エアニスは煙草を一口、大きく吸い込みながら茂みの奥に目をやる。そこには力無くうずくまるレイチェルと、彼女の背中をさするチャイムの姿。

車酔いである。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい・・・」

泣きそうな顔でレイチェルは謝る。

「いや・・・俺も運転乱暴だったしな・・・すまん・・・」

視線を逸らせながらエアニスも謝る。青ざめたレイチェルの顔を見るのが申し訳なく思う程度にはエアニスも反省していた。非難するようなチャイムの白い視線もなかなか厳しい。

事実、意図的に意地悪な運転をして山を下り、あまり良いとは言えない路面をずっと高速で走っていたのだ。我ながら、乗り物に弱い人だったら間違いなく酔っている運転だと思った。

「うーん、やっぱり今日中に出航手続きを済ませるのは無理かもしれませんね・・・」

トキが遠くに見てきた海を眺め呟く。

「・・・すみません・・・」

レイチェルが光を失った虚ろな瞳で謝る。

「ああ、レイチェルさんのせいじゃないですから・・・気にしないで結構ですよ！」

トキも思わずレイチェルから視線を逸らす。彼女は今、女の子の見られたくない一面を思いっきり晒している。

「にしても・・・ホントに大丈夫？」

「うん、だいぶ気分は良くなってきたから・・・」

草地で仰向けに寝そべり、空を仰ぐレイチェル。日が暮れ、冷えてきた風が気持ち良かった。

「じゃなくてさ、アスラムに渡るんだったら、港から1週間は船の上よ・・・」

船酔いとかは大丈夫なの・・・？」

「・・・・・・・・」

その言葉を聞いて、レイチェルの顔色がみるみる青ざめていく。

「うわーっ！！ごめん、レイチェルっ！！」

旅立ち早々に乙女としての危機を迎えているレイチェルから目を背け、エアニスとトキは慌てて彼女達の目の前から退散した。



それから更に3時間後。

エアニス達はようやく港街・ヴェネツィアに到着した。とっくに日は沈んでしまい、空の八割方が藍色に染まっていたが、それでも未だ人通りは多く街の活気を感じさせた。

混雑気味の大通りをエアニス達の車はゆっくりと走る。船の乗船手続きは予想通り締め切られていたので、仕方なくエアニス達は今日の宿を探して街をさまよっている所だった。港街という事もあり、物資を運ぶ軍のトレーラーや有名企業のロゴマークが貼られた運送車が頻繁に走っているの、幸いにもエアニス達の車が目立つ事は無かった。

「あの宿なんかどうでしょう？」

トキが身を乗り出し、行く手に見える派手な看板を指差す。大通り沿いにある観光客相手のリゾートホテルだ。

「そうだな、良さそうだ」

「えっ、まじ？ あんな高そうなホテルに泊まるの??」

「ちょっと贅沢じゃない・・・？」

チャイムが遠慮するような声で言う。綺麗な宿に泊まれる事は喜ばしいことだが、戸惑いの方が先立った。

「じゃなくって、追っ手から身を隠す為だよ。下手に人気の無い場所に行くより、こういう人間の多い街は、騒がしい所に隠れた方が見つからないもんだ」

「あ、なるほどね・・・」

2人部屋を2つ続きで取って、部屋に入るなりレイチェルはベッドに沈み込んだ。

「大丈夫ですか？」

「何か薬を用意しましょうか？」

トキが心配そうに問いかけると、レイチェルは顔をベッドに埋めたまま弱々しく頷く。

今は2つ取った部屋の1つに4人は集まっていた。

「どのみち買出しに行くから、一緒に買ってきてやるよ」

まだ街の商店が閉まるには早い時間なので、エアニスは今日中に必要な物資を買い付けに行くつもりだった。

「それなら、あたしも一緒に行く。あたしとレイチェルも買っておきたいものあるし」

チャイムが買出し係り名乗りを上げる。

「いや、お前もココにいる。買出しはお前らの分もしてやるからさ」

「んー・・・でも、頼みにくいのもあるからさ・・・」

チャイムの歯切れの悪い言葉に、エアニスは首を傾げる。

「どういう意味だ？」

「女物の下着とか頼まれても困るでしょ？」

チャイムは意地悪そうな顔をして率直に言ったが、

「別にかまわねーよ」



エアニスが迷う事無く快諾してしまったので、部屋に微妙な空気が流れた。

「いや・・・ごめん、

お願い。私も一緒に行かせてください・・・」

エアニスに頭を下げて買出し係りに志願するチャイム。こう言われてしまっは、お願いする立場に立つ他無い。

どん引きされている事に気付きもせず、エアニスは時計を確認する。

「まあ、いいけどさ別に。

行くなら今すぐ出るぞ。店が閉まっちゃう」

「あ、うん。ちょっと待つて」

チャイムは壁に掛けたマントと剣を掴み、エアニスの背を追う。

「では僕はレイチェルさんを診てます。気をつけて下さいね」

「ああ。食事は先に取ってていいからな」

エアニスは腰に下げた剣を掴みながら頷く。

「すみませんー・・・」

レイチェルの消え入りそうな声に見送られ、二人は買出しに出かけた。



大通りを歩くチャイムが空を見上げると、露店のテントや建物から張り出した屋根に遮られ、夜空がひどく狭く見えた。狭い空には穏やかに光る三日月が浮かぶ。その静かな空と騒がしいこの街があまりにも対照的で、空の向こうに此処とは違う別の世界が広がっているように見えた。

時刻は既に8時を過ぎている。にも関わらず街道沿いの飲食店や旅人相手の道具屋は閉まっている店が殆ど無く、客足も絶えてはいなかった。

戦争後期頃から街に電気が引かれるようになると、人々の生活時間帯は夜遅くまでずれ込むようになってしまった。ほんの十年前は、日が傾く頃には何処の店も閉まってしまい、日が沈む頃には皆床についていたというのに。

先の戦争で急激に発達した機械文明は、ようやく兵器以外の技術にも反映されるようになり、

人々の生活を変え始めていた。

「こうして歩いてみると、大きな街ね～・・・」

感嘆の息と共にチャイムが眩く。街灯や店先のランプがオレンジ色の光を放ち、この大通りに限ってはまるで昼間のような明るさだ。

「この辺りの交易の要だからな。遠くからモノを買い付けに来る商人も多い。

俺が知る限り、この街は金があれば何でも買う事ができるぞ」

どことなく不穏な物言いをするエアニス。

「・・・今から買いに行く物に、普通じゃ買えないようなヤバい物は入ってないわよね？」

「今日は、な」

「・・・」

この男に付いて行くと、いずれ身を滅ぼす事になるんじゃないかと本気で不安になるチャイムだった。



足元に買い物袋を置き、煙草を啜えエアニスは街角に座り込んでいた。

「おまたせ」

するとチャイムが買い物袋を下げて戻ってくる。例の、"エアニスに頼みにくいもの"を買ってきたのだ。手元のメモ書きを確認するエアニス。

「コレで買い物は全部だな。じゃ、宿戻るか」

煙草を手元の携帯灰皿に押し込み、腰を上げる。

「あ、ちょっと待って。あそこの店・・・」

「え。何？」

「ずーっと探してた本が置いてあったのよ」

「・・・お前緊張感足りなくねーか？」

「だって、1週間くらいずーっと船の上でしょ？」

そういう暇つぶしが欲しいじゃない。エアニスだってソレ・・・」

チャイムはエアニスの手元を指さす。そこにはエアニスがついでに買ってきた「内燃気の歴史」と題された本が。そう言われてしまうとエアニスも反論の余地は無い。

「チッ、分かったよ」

「今、チッって言った・・・」

「言っとくけど、そーいうのは自分のカネで買えよな」

「そんな事、言われなくても・・・！」

「泥棒！！」

言い合いになりかけた二人は突然響いた声に振り向く。すると、やっと人通りもまばらになっ

た街道を、麻袋を抱えた男が全力で走り抜けて来た。

有無を言わず、チャイムはエアニスに自分の買い物袋を押し付けて駆け出した。

「おいっ！！」

エアニスの制止を聞かず、チャイムは袋を持った男との距離を一気に縮め、男の背中にタックルをかけた。チャイムと男が砂埃を上げながら街道の石畳を滑っていく。

「なっ、この女っ・・・！」

バチンッ。

男が折りたたみのナイフを抜いた。それに気づいたエアニスは、両手に抱えた荷物を手放し咄嗟に胸元の小銃に手を掛ける。買い物袋が地面に落ち、中身をぶち撒ける。

だがその心配も無く、既にチャイムはナイフを持つ男の腕をひねり上げ、関節を固めていた。ギリギリと男の肘をねじ上げて自分の方を向かせる。

「あんたっ！！」

その袋人から盗ったモノじゃないのっ！？」

「いでででっ！！このっ放せえっ！！」

「暴れんじゃないわよ！！」

腕折るわよっ！？」

その周りには、騒ぎに気付いた野次馬達が人垣を作り始めていた。やれやれと、エアニスは頭に手を当てる。

エアニスにとってチャイムはどうにも頼りない印象だったが、すこしは戦えるようである。

窃盗犯に一瞬で追いついた瞬発力といい、ナイフに怯えずその腕をひねり上げる事といい、そう簡単に出来る事では無い。エアニスはパチパチと手を叩き、チャイムに歩み寄る。

「やるじゃん。見直したよ」

「そりゃどーも。で、どうしよう、こいつ？」

その質問に答えず、エアニスはチャイムに押さえつけられた窃盗犯の頭を、硬いブーツで思いっきり蹴飛ばし、気絶させてしまった。

青ざめるチャイム。

「だから・・・乱暴すぎるって・・・」

「ああ・・・俺はこういうカス野郎には厳しいからなあ・・・」

「なんで他人事みたいに言うの？」

「す、すみません。大丈夫でしたか？」

麻袋の持ち主だろうか。気弱そうな男が野次馬をかき分け現れた。

「大丈夫よ。」

あなたね、これを盗られた人は・・・って・・・！」

チャイムはその男の顔を見て、驚きの表情を浮かべた。

「エリオットじゃない！！」

「あ・・・チャイム先輩!？」

現れた男も、驚いた顔でチャイムの名を呼んだ

「チャイム・・・先輩？」

一呼吸遅れてエアニスが奇妙な響きの呼び方に苦笑いを浮かべた。

「ほんとに久し振りね、元気してた！！？」

「はあ、そこそこは・・・」

久し振りに見知った顔に会えたのが嬉しかったか、チャイムは上機嫌である。それに対し、エリオットと呼ばれた男は、チャイムの浮かれたテンションについていけない様子だった。

場所は大通りに面した酒場。

そこでチャイムとエリオットは、食事を取りながら旧友との再会を楽しんでいた。もちろん、チャイムの隣には少し距離を置いてエアニスが座っている。

因みに大通りでチャイムとエアニスが畳んだ物盗りは、憲兵隊の詰め所に連れて行くのが面倒だったので、ロープで縛って路上に転がしておいた。放っておいても野次馬の誰かが通報してくれるだろう。

「で、こっちはどちらさん？」

ずっと状況が飲み込めずにいるエアニス。正直チャイムの知り合いなど、どうでもよいのだが、付き合いとしてとりあえず尋ねておいた。

「ああ、私がエベネゼルにいた時に、一緒の隊で訓練してた後輩なの」

「・・・訓練って何の？」

エアニスはチャイムがエベネゼルで何をしていたのか知らないので、話が見えてこない。

「騎士団の訓練に決まってるでしょー」

「はあ？」

一瞬自分の耳が馬鹿になったのかと疑うエアニス。

「お前、ひょっとしてエベネゼルの・・・」

「うん。聖騎士団員よ。あれ、言ってなかったっけ？」

「・・・へー・・・。」

彼女の予想外の肩書きに、エアニスは遠い目をして無感動な声を上げる。

騎士ってこんなヘナチョコでもなれるんだ・・・エベネゼルはよほど深刻な人材不足問題を抱えているとみえる。いや、さっき泥棒をシメた時の手際はよかったけどさ。

という感想は、心の中だけに留めた。

二日前。4人でトキの買ってきたケーキを食べたあの時。

エアニスはチャイムの大剣の柄にエベネゼル騎士団の紋章が刻まれているのを見ていた。エアニスにとって、あの時はまだ彼女達の事は"どうでもいい事"と捉えていたので、あまり深く考えてはいなかったが、まさか本当に騎士団員だとは思いつけなかった。

いや、騎士団の剣を持っているのだから、普通ならば真っ先にその可能性を思いつくべきなのだろう。しかし、あまりのチャイムの頼りなさ、らしくなさに、彼にその考えは欠片も頭をよぎらなかったのだ。

「ちょっと・・・何か失礼な事考えてない？」

「そんな騎士様、滅相も無い・・・」

エアニスの微妙な半笑いにチャイムが眉を吊り上げた所で、丁度注文していた飲み物がテーブルに届けられ、不毛な争いは起こらずに済んだ。

「エリオット=グラハムと申します。今はその、エベネゼルからの派遣員としてこの地の視察をしている所です」

エアニスに自己紹介をするエリオット。チャイムを先輩と呼んだので、恐らく17、8歳だろうか。金髪で童顔の、騎士と呼ぶには頼りない印象だ。チャイムといいエリオットといい、エベネゼルの騎士はみんなこんなのだろうか？

「エアニスだ。今はこいつの用心棒みたいなことをやらされている」

「やらされてるって、アンタ・・・」

あ、エリオット。

ここは第三国からの要請で来てるの？ それともウチの自主派遣？」

「ええ、本国からの通達で・・・その・・・」

言いくそうにチラリとエアニスの顔を見るエリオット。部外者であるエアニスに聞かれるのはまずい話なのだろうか。

「すみません、人の目もあるのでここで話す事は・・・」

「じゃ、場所変えるか」

まだ注文した食事や飲み物も殆ど残っているのに、エアニスは口元を拭きながら言う。唐突な提案にチャイムは彼にいぶかしげな視線を向ける。

「振り向くんじゃないぞ。さっきから入り口側のカウンターに座った二人組みが、こっち見てる」

「！」

「それって、ルゴワっ」

チャイムが露骨に動揺した声を上げたので、エアニスはチャイムの口にパンを押し込み黙らせた。

「違うと思う。その二人組、ずーっとあなたの事を見ているようだ」

言いながらフォークでエリオットを指すエアニス。エリオットは苦い表情を浮かべる。

「心当たりあるんだな？」

「・・・ええ」

意外と動揺の色を見せないエリオット。見かけよりは度胸があるのかも知れない。

「申し訳ありません、先輩。巻き込んでしまう前に、僕は行きますね。まだ暫く街にいるつもりですので、機会があれば、また」

エリオットは椅子に立て掛けた大剣を取り、マントを羽織り店を出て行った。チャイムは引きとめようとしたが、エアニスの視線に釘を刺され、エリオットに声すらかける事も出来なかった。自分達もルゴワールに追われる身である。あまり目立った事は出来ない。

そしてエリオットを追うように、エアニスが指したカウンターの二人組みも店を出て行った。

「さて、じゃ俺達も行くか」

「行くって、どこによ？」

どこか非難するような、慥然としたチャイムの表情。その言葉に対しエアニスは意味ありげに笑う。

「どっちがいい？」

エリオットの出た方向と、その逆の方向を交互に指差し、エアニスは悪戯っぽい笑みを浮かべる。その笑顔に、チャイムの目が点になる。そしてニカッと笑うと、

「コッチに決まってるじゃない！」

チャイムが指さすのはエリオットの歩いていった方向。

「ま、いいだろ」

エアニスは少し大目の代金をテーブルに置くと、剣を片手に立ち上がる。

何だかんだで、この男もお人良しなのかもしれない。チャイムは苦笑を浮かべながら席を立った。



「お前か。俺達の事を嗅ぎ回っている奴は？」

路地の奥から粗暴な凄み声が聞こえる。

エアニスとチャイムがエリオットを見つけた時、彼は人気の無い倉庫街で四人の男に囲まれている所だった。

「今日の取引の事を知っているんだな？」

エリオットの前に立つ大男が、彼を見下ろしながら問い掛ける。

「取引場の関係者の方達ですね？」

あなた方のボスにお会いしたいんです。案内していただけますか？」

エリオット言葉に、男達は声を揃えて笑い出す。

「お前みたいなガキにボスが会ってくれるわけねーだろ！！」

男がエリオットの襟元を掴んだ。エリオットは仕方ない、といった表情で腰の剣に手を掛けた。

気弱そうなエリオットの顔が、すう、と暗い眼差しに変わる。

彼の襟首を掴んだ男に嫌な寒気が走った。

ごいんっ！

鈍い金属音が響いたと思うと、エリオットを掴んだ男が白目を剥く。クタリと崩れ落ちた男の背後には大剣の腹で男の脳天を一撃したチャイムが立っていた。

「！・・・先輩！！」

「なんだ、この女！いつの間につ！」

男がチャイムに掴みかかろうとするが、剣を切り返したチャイムに腹部を打ち据えられる。大

剣の刃は潰されているとはいえ、この重みをまともに受けたのだ。泡を吹いて男は崩れ落ちた。

顔色を変える残りの二人の男達。胸元に手を入れ、抜き出したのは・・・

拳銃。

『！！？』

街のチンピラの予想外のエモノに、チャイムとエリオットは硬直する。

ばがん！

しかし男の一人が景気の良い音と共に前のめりに勢い良く倒れ込んだ。

「なっ・・・誰だっ！？」

そこには鞘に納まったままの剣をバットのよう構えるエアニス。

どごん！

そのままボールを打つかのように、男の頭を叩き飛ばした。

ガヒィンッ！！

同時に男の銃が暴発し、チャイムのすぐ足元の石畳を砕いた。

「うひiiiiiiiiっ！！！」

「お、なんだこいつ。銃なんて持ってやがったのか？」

「ちょっとは慎重に戦ってよおっ！！」



「・・・ということで。エリオット、怪我は無い？」

言いたい文句を一通りエアニスにぶつけた後、チャイムはエリオットの身を案じるように声を掛けた。

「はい、特には・・・。すみません、先輩」

「そ。・・・ところで、さっきの取引って？」

エリオット、あなた結構危ない事に巻き込まれてるんじゃないの？」

彼は困った表情を浮かべる。話せない事情があるのか、それともチャイムを巻き込む事に抵抗があるのか。

「心配しないで。ああいうチンピラだったら何十人いようと、アレが全部相手してくれるからさ」

そう言いながらエアニスを指さす。エアニスはアレ呼ばわりされた事より、またトラブルに自分から関わろうとするチャイムに呆れていた。こうやって、旅先でいつも困った人間を助けているのだろうか？

エアニスには、そこまで他人の為に尽くすチャイムの思考が理解できなかった。

チャイムに半ば詰め寄られるような形のエリオットは、渋々といった様子で事情を話し始める

。

「・・・実は、エベネゼルの兵器開発所から流出した銃が、この街の闇市で今日、売りに出されるという情報があったのです」

「銃の闇市・・・!？」

一部の国を除き、この世界では一般人が銃を持つ事は許されていない。何処の国も国家が銃の管理と独占を行い、国軍や一部の憲兵達しか手にする事は出来ないのだ。

しかし、兵器工場と繋がりのある犯罪組織が、工場から横流しした銃器を裏で一般人に高額で売りつけているという現実がある。

「先日、本国の兵器開発研究所に出入りしていた技術者をスパイ容疑で拘束するという事件があったそうです。そのスパイが、開発中の新型銃の試作品と設計図をヴェネツィアの闇市へ流したと自供したそうで。

それで各地の派遣員に、ヴェネツィアで銃器密売の事実を調査しろと指令が下ったのですが・・・

どうやらヴェネツィアの近くに居た派遣員は僕だけだったようでして。一人で調査をしていたところですよ」

「・・・・・・・・」

チャイムは黙り込んでしまった。チャイムもこうしてヴェネツィアに居る訳だが、彼女はエベネゼル本国からの通達を知らなかった。国外に出ている騎士団員は定期的にエベネゼルと協力関係にあるギルドで、本国からの定期連絡・指令を聞く義務がある。しかし、レイチェルの件に関わって以降それどころではなくなっていたのだ。

それはまあ・・・さて置いて、とチャイムは自分を棚に上げて、

「そんな・・・一人でなんて無理よ。エベネゼルの駐留するレオニール軍に協力を・・・」

「それじゃエベネゼルの名に傷が付くもんな」

黙っていたエアニスが口を挟む。

「建前を何よりも大事にしている国だ。自分の国から流れた銃器が他国の闇ルートで売られてるなんて、イメージダウンもいいところだ。できるだけ内密に回収しろとか、指示されてるんだろ？」

エアニスの言い方が気に入らないチャイムはムツとした表情を浮かべるも、エリオットが苦い表情で頷いてしまったため、何も言えなくなってしまった。

確かにチャイムの故郷、エベネゼルの世界に対し自国の健全性を過剰なまでにアピールしている節がある。

平和の象徴、正義の国、世界一の宗教国家、貧困国に対する惜しみない慈善活動。

そういったイメージを定着させ、それを維持する事に躍起になっているのだ。チャイム自身それを感じる事はあったので、なおさら反論し辛かった。

「まあ、そういう話なら俺はパスだ」

「えっ!？」

エアニスの宣言に目を丸くするチャイム。

「そんな、私とエリオットだけじゃ、あんな銃持ったチンピラ集団相手にできないわよっ!」

「知るかよ。俺に頼るな。」

とにかく、こんな事に付き合う義理は無い。お前らだけで何とかしろ。

今日は運転で疲れてるから先に宿に帰らせてもらうぞ」

突然態度が冷たくなるエアニス。言いたい事だけ言って、一人で歩き出してしまった。

「ちょっ、ちょっと待ってよ！

お願い、協力してっ。あんたならあんなチンピラ相手にするの朝飯前でしょ！？」

「気が乗らねー」

チャイムはエアニスの袖を掴み引き止めようとしたが、見向きもされず乱暴に振りほどかれてしまった。

「~~~~っ、いいわよっ私たちが何とかするからっ！！

バカ！！アホ！！この男女あっ！！」



チャイムには言えなかったが、エアニスがあのエリオットという騎士に協力できない理由は別の所にもあった。

エアニスも、その闇市の客なのだ。とある倉庫で月に一度、銃の密売会が行われる事はエアニスも知っている。エアニスの家に隠されていた銃器も殆どがこの街の密売所で手に入れたものであり、エアニスにとっては近場で銃を手に入れるのに丁度良い場所なのだ。それを自分から潰しに行く気にはなれなかった。

そしてもう一つ。エアニスは個人的な恨みから、エベネゼルという国が嫌いであった。

その名を口にすることで、胸が焼ける程に。

エアニスはチャイムを置き去りにして、宿に向かって歩いていた。

しかし1人で宿に戻れば、トキやレイチェルに責められるのは明らかだ。今更どうしたものかとエアニスは足を止め、1人ベンチに腰掛けてぼんやり考える。

「・・・馬鹿か、俺は。これじゃただの八つ当たりじゃねーか・・・」

頭を掻き独り言を呟くエアニス。あの国の事となると感情的になり易いのは自覚している。ああいう態度を取ればチャイムも仕方なく諦めるのではないかと思ったが、彼女は余計にむきになってしまい、全くの逆効果だった。彼女の性格を考えれば容易に想像できる反応なのに、さっきのエアニスはそれができなかった。

腰に繋がった懐中時計を見ると、もう日付の変わる時刻であった。銃の取引は普段、あと1時間後に、港のとある倉庫で行われる。

「はぁ・・・早くアイツ連れて帰らないと、トキ達が怒るな・・・」

エアニスは嫌々といった様子で、ベンチから腰を上げた。



一方、チャイムとエリオットは港の倉庫街を探索していた。エリオットの情報によると、この

辺りの倉庫で取引が行われるというのだ。

だが、どの倉庫かまでは見当が付かず、当ても無く倉庫街をさまよっていると、路地から体格の良い男達が道を塞ぐように立ちはだかった。

「・・・ただのカツアゲって風じゃないわね」

この状況で現れたのだ。闇取引の関係者達だろう。

チャイムは早鐘を打つ心臓を落ち着かせようと静かに息を吐き、腰の大剣に手を掛ける。

「遅かったな、エリオット」

ごろつき風の男達の中に、一人だけ雰囲気の違いがいた。

明るい色のスーツを着た、白髪交じりの髪を後ろに撫で付けた初老の男。右手に握ったステッキと、それを握った指に輝く大きな指輪が成金趣味を感じさせた。

「バイスさん、遅くなりました。銃を狙っている他組織の妨害があったもので」

「・・・！？」

エリオットはバイスと呼ばれた初老の男と顔見知りのように話す。



「えっ・・・なに、コレ・・・エリオット、どういう事！！？」

状況を掴めず戸惑うチャイム。彼女に視線を向けて、バイスがエリオットに問いかける。

「何だ、この女は？」

エリオットは困ったように頭を掻き、

「すみません。たまたま街で会った同郷の先輩で、付いて来てしまっただけです。

バイスさんとお会いするまでには何とかしようと思ってたのですが・・・」

どんっ！

エリオットの剣の柄が、チャイムの腹部をえぐった。柄はまともに彼女のみぞおちに入り、チャイムは息も出来ず思わず地面に膝をついた。

「・・・っあ・・・っ！」

息も絶え絶えに、チャイムはエリオットを見上げる。

「すみません、先輩。銃器の流出の話、密売人は僕なんですよ。

派遣兵として密売の調査に来たという名目があれば、この街で堂々と動く事ができますからね。適任でしょう？」

「・・・！？」

「先輩が悪いんですよ？僕は先輩を巻き込むつもりはなかったのに、先輩がお節介にも付いてきてしまうから・・・。

あ、でも大通りで泥棒を捕まえてくれた事には本当に感謝しています。あれは取引品を狙っていた敵対組織だったんです。本当に助かりました。

・・・先輩？聞いてますか？」

チャイムは薄れゆく意識の中でかつての同士の言葉を聞いていた。

その声はチャイムの良く知る、人懐っこく、少し遠慮がちなエリオットの声。

聖職者でありながら金に目が眩み、闇に魅入られ手を汚した者の言葉。

何かを言おうと必死に声を発しようとしたが、喉を振るわせる事すら出来なかった。

そして、チャイムの意識は闇に落ちる。

「ほう、これが・・・」

とある倉庫の一室。密売所の元締めであるバイスは、エリオットの空けた小さなケースの中身を覗き、感嘆の声を上げる。

ケースの中には銀色に輝く、有機的な形をした銃が収まっていた。近代の銃は、どれも工業製品然とした味気ないデザインのものばかりだが、その銃は職人が作ったような温かみのある造形をしている。

単純な芸術品としても、それは価値のある物の様に見えた。しかし、これの持つ価値は、その中身にある。

「エベネゼルが全面出資している兵器会社に作らせた銃です。

ただの機械式ではなく、魔導技術も適用した、今までにない構造を持つ銃です。

銃の始まりは魔導師が作った魔導式の道具が始まりだと言われています。

それから時代が進むにつれて、銃は魔導師以外の人間も扱えるよう機械式へと進化して行きました。ですから、これはある意味先祖返りをしたという事になるのかもしれませんがね。

魔導技術と機械技術の融合が研究分野として確立しつつある今だからこそ出来る銃です」

バイスは銃と一緒に添えられた紙の束を手にとって、広げる。

「試作品の一つと、設計図を持ち出すだけで精一杯でしたが、これだけの資料があれば、この銃の複製を量産することは可能でしょう」

バイスは隣に控えた男に設計図を渡す。その男は銃器開発の技師だった。男は設計図に目を通し、暫くしてからバイスへと頷きかける。

バイスも満足そうに頷いた。

「よくやってくれた、エリオット。ここまで大変だっただろう。約束の金には、色をつけさせて貰うよ」

「ありがとうございます」

その一部始終を、意識を取り戻したチャイムは見ていた。彼女は今、後ろ手に縛られ倉庫の鉄柱に縛り付けられている。

「エリオット・・・あなた、自分がどんな立場の人間で、どんな事をしてるのか分かってるの！？」

「貴方はエベネゼルの聖騎士でしょ！！」

しかしエリオットは気弱そうな笑みを浮かべ、

「聖騎士になって得られる物など、上っ面の名誉だけで、他には何も無いじゃないですか。僕達下っ端は給料だって沢山貰えるわけじゃあない。先輩は知ってましたよね。僕の家、父さんは戦争で死んでしまって、稼ぎ手は僕だけだって。小さな兄弟達も多いから、こういう仕事もしないと家族を養えないんですよ」

「だからって・・・」

言うべき言葉が見つからず、チャイムは言葉を詰まらせた。エリオットはバイスに向き直る。

「バイスさん、先輩・・・彼女は どうするつもりなんですか？」

「決まっている。この取引を見られた以上、口は塞がねばならん。

それに・・・まあまあいい女だ。部下どもの好きにさせようかと思ってるが？」

バイスはろくに考えもせず答える。しかし、当然の事だろう。取り巻きのごろつき達が下卑た笑みを浮かべていた。

「すみません。その役は僕に譲って頂く事はできませんか？」

報酬につける色は、必要ありませんから」

エリオットの申し出に、バイスは部下達の顔を見回し少し考えると、

「・・・まあ、いいだろう」

「ありがとうございます」

チャイムは絶句し、エリオットを見上げる。

彼はバイスから小さなリボルバーを借り受けると、撃鉄を起こしチャイムの頭に銃口を押し当てた。

気弱な顔を、申し訳無さそうに、悲しそうに、歪めながら。

「すみません、先輩。せめて痛くないように済ませますから・・・ごめんなさい、許してください・・・」

「エリ・・・オット・・・」

チャイムは縛られて動くが出来ない。チャイムは俯き、死を覚悟する。

キリリと、引き金のスプリングが鳴った。

ビシュッ！ぶしゅっ！

濡れた破裂音が聞こえ、チャイムの視界で血が弾けた。

自分の血かと思ったが、違う。血と共に地面にリボルバーが転がり落ちた。

「うわああっ！！」

エリオットが短い悲鳴を上げる。リボルバーを握っていた彼の手は数発の銃弾に打ち抜かれ、手の平の指は数本欠けていた。

「チャイム！！そこにいるのか！！？」

倉庫の入り口から聞こえたのはエアニスの声だった。

呆けていた男達は我に返る。

「エアニス！！？」

「馬鹿野郎オ！！自分から厄介事に首突っ込みやがって！

少しは自分の立場わきまえろっつーの！！！

ただでさえ追われる身なのにこんな目立つ事して———」

「お、お、女の仲間だ！ 撃て！！殺せ！！」

倉庫内に居た男達は全員銃で武装している。男達はバイスの号令と同時に、一方的に文句をまくし立てるエアニスに向け発砲した。

エアニスは舌打ちしながら、倉庫内の光の届かない場所へ身を隠す。

「どこだ！？隠れたぞ！！」

「明かりは無いのか！？」

倉庫内は天井からの明りが中心部を照らしているのみで、光の届かない場所が多い。エアニスを見失い、辺りを見回す男達。

ガン、カン、コン・・・

どこからともなく聞こえてくる、金属を叩く音。

「何の音だ・・・？」

「奴は・・・」

それは倉庫の鉄骨をエアニスが踏み鳴らす音だった。エアニスはあっという間に照明の裏側、屋根の梁へと駆け上がる。そして、そのまま男達の頭上へ身を躍らせた。

倉庫内を照らす照明に、一瞬大きな影がよぎった。

「上だ！！」

バイスの叫びに男達も一斉に天上を仰ぐ。

どしゃあつ！

バイスはエアニスによって背中から腰にかけて深々と斬りつけられ、その場に潰れるように倒れ伏した。

「う、わああああ！」

その凄惨な光景に恐怖しながら、男達は自分達で作る円陣のど真ん中に立つエアニスに銃口を向ける。しかし、エアニスを挟んだ向こう側の仲間に弾が当たるのではないかと躊躇し、引き金に掛かる指が止まった。

「殺し合いの最中にためらいを見せるな」

エアニスが冷徹な声で言い放つ。その体がふわりと揺れたかと思うと、エアニスは低い姿勢で男達の間を駆け抜けながら刃を振るった。

時間にして3秒あっただろうか。

5人居た男達は一瞬でエアニスに胴を、足を切り飛ばされ、発砲するどころか悲鳴すら上げることなく床に転がった。

今のエアニスは剣を鞘から抜き放っていた。ミルフィストで追っ手と戦った時は、剣を鞘に収めたまま戦っていたのに、だ。

一瞬の、そして突然の出来事にチャイムの全身から血の気が引き、恐怖でまばたき一つ出来なくなる。

エアニスが、人を殺した。

髪を揺らし、剣を翻すエアニス。剣に絡みついた血を振り払うその姿は、まだ血煙の向こう側にある。その光景はどこか現実味を欠き、異様で、おぞましく、そして綺麗に見えた。

「ば、化け物っ！！」

それを遠巻きに見ていた残りの男達が倉庫から逃げ出す。エリオットもまだ取引が終わっていない以上、このまま解散されては困る。取引道具の銃が入ったケースを掴み、倉庫から逃げ行

った。

「なんだ、つまらん連中だな」

エアニスは逃げる男達に目もくれず、チャイムを縛る縄をほどきにかかった。

「おい、何があった？」

さっきお前のアタマに銃突きつけてたの、お前の後輩じゃなかったのか？」

しかし、チャイムはエアニスの問いに答えず、縄を解かれるなり両手でエアニスの服に掴みかかった。チャイムが何のつもりか分からず、戸惑うエアニス。

「殺す事・・・なかったんじゃないの・・・」

「・・・あ？」

エアニスはチラリと自分が斬り倒した相手を見る。分解されてバラバラになったマネキン人形に見のようだと思った。

そういえば、チャイムの前で人を斬ったのは初めてだ。

いや、そもそも人を斬った事が随分と久方ぶりだ。最後に人を殺したのはいつだったかと思いついて出そうとしたが、思い出せなかった。

エアニスを掴むチャイムの手は震えている。ひょっとしたらチャイムは、人の死ぬ場面をあまり見たことが無いのだろうか。

「相手が銃を持ってこっちを殺そうとしてきたんだぞ。加減して相手をする義理も、余裕もない。自分の為ならまだしも、他人・・・お前の身を守る為ならば、なおさらだ。

人が死ぬ所を見たくないのは分かるが、お前もこっちの世界で生きてるんなら、そのくらいの事は割り切れ」

いい加減、チャイムの甘さに苛立ちを感じ始めていたが、エアニスはできるだけ優しい口調で諭し、服を掴むチャイムの手をほどいた。

下唇を噛むチャイムの様子にエアニスは気まずそうに頭を掻き、誤魔化すようにエリオット達が逃げていった路地に目をやる。

そうだ、今はこんな論議をしている暇ではない。

「追うのか？」

「・・・追うわ」

顔を上げ、はっきりと答えるチャイム。

エリオットに裏切られた事、エアニスのした事はショックだったが、今は立ち止まっている場合ではない。



エリオット達の追跡は容易だった。

エアニスの銃弾でエリオットは傷を負い、彼らが通った通路には血が点々と残されていたからだ。

その血痕を辿り、暗い倉庫街をエアニスとチャイムは走り抜ける。

「エリオットは・・・こんな事する子じゃないわ。きっと、他にも事情があるのよ・・・」

チャイムは事の成り行きをエアニスに説明し、エリオットの事は自分に信じ込ませるように呟いた。

「エアニス、お願い。あの子だけは絶対に殺さないで」

「・・・頼みならば、努力はする。しかし、万一の時は、分かるな？」

「・・・」

頭では分かっているが、心が割り切ってくれない。チャイムは頷く事ができなかった。

「・・・見つけたっ！」

路地の先に、男達の背中が見えた。

「チャイム。ここで止まって目と口押さえてろ」

エアニスはそう言う懐から小さな缶を取り出して、それを逃げる男達に投げつけた。

ばしゅうっ

閃光とともに白い煙が元締めたちを包み込む。とたんにチャイムは目の痛みを感じた。催涙ガスの類だろうか。エアニスはそのまま白煙の中に飛び込み、護衛の男達を倒しにかかる。何故かエアニスはガスの中で平気なようだが、男達はまともに目を開けていられない様子だった。エアニスの存在を感じ、無闇に銃を乱射するも、あっさりとエアニスに首筋を、みぞおちを叩かれ、次々と気を失っていく。

チャイムがエアニスに追いついた時、ガスの薄れた路地に立っていたのは鞘に納まったままの剣を肩に担ぐエアニス一人だけだった。

しかし。

「おい、アイツは何処に行った？」

エアニスが白煙の中で、片っ端から倒した男達の中にエリオットの姿が無かった。

「こいつらはどうでもいいんだがな・・・」

つまらなさそうに、足元に転がる男をブーツで小突く。

「一緒に逃げて行ったのは間違いないわ。

さっきの白煙に紛れて、どこかに隠れたのかも・・・」

その言葉を聞きながら、チャイムの肩越しにエアニスはエリオットの姿を見つけた。彼女の体が邪魔をして、彼の存在に気付くのが遅れてしまった。既にエリオットの握る銃は、チャイムの後ろ頭に狙いが定められている。

ほんの一瞬の攻防がとても長く感じられた。

チャイムはエアニスの視線を感じて、後ろを振り向く。そこにはチャイムに銃口を向けるエリオットの姿。しかし、彼女が何らかの反応を示すよりも早く、彼女の体はエアニスによって真横に突き飛ばされる。そしてチャイムの目の前に、小銃を握ったエアニスの左手が伸びる。狙いは既にエリオットの眉間へと定められていた。

「駄目えっ！！」

チャイムは銃を構えたエアニスの左腕に掴みかかった。チャイムの行動に、エアニスは動揺

する。



ばづっ！

エアニスの目の前で血霧が散った。エリオットの銃弾がチャイムに当たったのだ。倒れ込むチャイムを抱えながらも、エアニスはエリオットに銃口を向けようとする。しかし、エアニスの腕をチャイムが掴んで離さない。

「このっ、馬鹿がっ！！」

エアニスは反撃を諦め、自分の背中を盾にしながらチャイムをひきずり路地の曲がり角へと逃げ込む。その間も銃弾はエアニスを襲ったが、幸いそれが当る事は無かった。

チャイムを抱え路地を何度も曲がりながら走り、エアニスはエリオットから距離を稼ぐ。路地の塀にもたれかかり、僅かに乱れた呼吸を整え、らしくもなく額に浮いた冷や汗を拭った。

「あなた、今エリオットを殺すつもりだったでしょ・・・！？」

開口一番。助けられた礼も言わず、自分の怪我にも触れず、チャイムはエアニスの襟元に掴みかかった。この一言に、流石のエアニスも頭に血が登る。

「ふざけんな！！

俺が助けてなかったらあいつに殺されてたんだぞ！！

そんな甘い考えでこの旅に付いて来るんだったら、ここで降りろ！！

足手まといだ！！」

エアニスは掴み掛かるチャイムを突き飛ばす。チャイムは壁にぶつかり、そのままうずくまるように座り込んでしまった。苦しそうなうめき声が漏れる。

「・・・！！」

我に戻るエアニス。チャイムはエリオットの銃弾を受けていたのだ。慌ててチャイムの傷を確認する。銃弾はチャムの二の腕を貫き、深い傷を残していた。

ハンカチをチャイムの腕に当て、簡単な手当てを済ませる。まだ血が流れ出しているが大きな血管が傷付いている様子はない。弾も抜けているし大した事はなさそうだ。

「傷口押さえとけ。このくらいの傷なら出血もじきに止まる」

「さっき、あたしを助けてくれた時とかさ・・・」

「ああ？」

「何であんな簡単に人を殺せるの・・・？」

「必要な事だからだ。ああしなきゃ、お前が殺されていたかもしれないんだぞ」

「・・・トキから聞いたよ・・・あなた、出来るだけ人を殺さないようにしてるんだって？」

「！・・・それは、」

余計な事を、と内心舌打ちをする。

「あたしを倉庫で助けてくれた時は・・・違ったけど、さっきの路地裏の男達や、ミルフィストで遭った追っ手達は、殺さなかったじゃない・・・」

どうして？ どうしてそんなに簡単に人を殺せるのに、あなたは普段"殺さない"っていう選択肢を選ぶの？

必要に迫られれば殺せるとか、そんな理屈じゃ無いわよね？

理由があるんでしょ？

だったら・・・！」

もう誰も傷つけないで

ビクン、とエアニスの体が震える。

雨の降りしきる暗い森。

目の前でじわりと広がる赤い染み。

繋いでいた暖かな手が離れてゆく感触。

昔の記憶がフラッシュバックで蘇り、エアニスは懐かしい声を聞いた。

そしてその言葉はエアニスの心を深くえぐる。

どうせ自分は、人を傷つけることしか出来ない人間だから

「・ニス・・・エアニス！

どうしたの？大丈夫！？」

気付けばエアニスは地面に片膝をついていた。強烈な立ち眩みに襲われたように、頭の奥が痺れている。

「・・・なんでもない」

エアニスは息を乱し、額に汗を滲ませていた。その只ならぬ様子に、チャイムは聞いてはいけない事を聞いてしまったのだと自覚する。

「・・・先、輩・・・」

弱々しい声にエアニスとチャイムは振り向く。そこに立っていたのは、左手で銃を構えたエリオット。銃の取引でいくら貰う事になっていたのか知らないが、こうなってしまうては金を受け取るどころでは無いだろう。エリオットの表情は疲れ果てていた。

「すみません・・・今回の件を知られた以上、先輩を消さないと・・・次の仕事に移る事も、エベネゼルに帰る事も出来ません・・・先輩、すみません・・・」

その声もどこか虚ろで、空しく聞こえた。

ガキン！

エアニスが石畳に剣を突き刺し、ゆっくりと立ち上がる。全身には今だ虚脱感が残っていたが、エリオット達に対狩る苛立ちがそれを上回った。

「カス野郎が・・・目障りだ、」

しかし、チャイムがエアニスを制する。

「お願い。この子の相手は、あたしにさせて」

「嫌だね」

「お願い、エアニス」

「・・・わあったよ・・・クソが・・・」

エアニスは大きな溜息を吐いて剣を鞘に収めた。苛立ちをぶつける捌け口を奪われ、彼は不機嫌そうに対峙する二人を眺める。

チャイムの武器は剣に対し、エリオットは銃である。二人の間合いはそれなりに開いており、チャイムの勝てる要素は一つも無かった。エアニスは懐に手を伸ばし、チャイムに気づかれないように胸元の銃の撃鉄を上げ、対峙する二人を見守る。必要であれば、これでエリオットの頭を打ち抜くつもりだった。

彼女の目の前であろうと。

「あなたがこんな事する子とは思わなかったわ・・・本当に、これはあなたの意思なの？ 誰かの差し金だったり、するんじゃないの？」

この後に及んで、まだ後輩を信じようとするチャイム。

「言ったじゃないですか。こうでもしないと、家族を生活させる事ができないって・・・その為に必要な事だと思い、僕が選んだ道です」

チャイムはやるせない気持ちに目を伏せる。それはエリオットなりの答えなのだろう。エリオットにとっては家族を守ることが全てであり、それを成す事がエリオットのすべき事なのだろう。

正しいと思う事が、チャイムとエリオットで違っていたという、ただそれだけの事だ。「あなたの家族が助かる事で、その銃がこれから沢山の人の命を奪う事になるのであれば、あたしはあなたを見過ごす事は出来ないわ・・・」

「そうですね。先輩は特定の一人より、不特定の多数を大切にする人でしたからね」
「っ！」

エリオットの言葉がチャイムの胸を抉る。それについて彼女は何も言わず、その代わりにゆっくりと大剣を構え直した。エリオットも腕を伸ばし、チャイムの胸に銃の狙いを定めようとする。

そのエリオットの表情が、驚愕の色に変わる。
「！！」

そしてエアニスも。
いつの間にかエリオットの体に、幾本もの"糸"がまとわりついていて、ふわりと風になびく、淡く光る蜘蛛の糸。

「なっ・・・拘束術！！？」
今のエリオットは体を動かす事も、銃の引き金を引くことも出来なくなっていた。怪我をしてぶらりと垂れ下がるチャイムの右手には、エリオットにまとわり付く糸と、同じ色の光が輝いている。

チャイムは振り上げた大剣を肩に担ぎ、駆け出した。
「アタマ冷やしてきなさいっ！！」
そして、エリオットの脇腹に大剣の一撃を食い込ませる。
体を動かす事も出来ないまま剣の重みに突き飛ばされ、エリオットは石畳の上に転がり気を失った。

チャイムがその気になれば、呆気ないものだった。

がらんっ・・・
重たい剣を取り落とし、チャイムは歪に切り取られた夜空を見上げる。
どうしようもなく涙が溢れる。涙がこぼれないように空を仰いでみたが、そんなことでは誤魔化しきれず、次々と涙が流れて落ちる。

「・・・おつかれさん」
エアニスは優しく、彼女の頭に手を置く。
「う・・・ええええーん・・・グスッ・・・」

「泣くなよ……。お前もあいつも、悪くない。

お前らなりの正義だったんだろ。この世に2つ以上の価値観がある以上、こういう事は仕方ない。

こんな事でヘコんでるようじゃ、今の時代、しんどいぞ」

チャイムはグスグスと鼻を鳴らしながら涙を拭くと、キッとエアニスを睨みつける。もう、いつも通りの彼女の顔だった。

「何よそれ。慰めになってないわよ……。バカ」

「慰めてねーよ。これは説教だ」

素っ気無く、エアニスは言った。

「……。魔導が使えるなんて、聞いてなかったぞ」

「言ってなかったからね。

エリオットも、知らなかった筈よ。だから、あんな簡単な術に捕らわれちゃったのね」

チャイムは口をへの字に曲げ、何かを呟きながらエリオットに撃たれた傷口を軽く撫ぜる。傷口に巻かれたエアニスのハンカチをほどくと、既にそこに傷は無くなっていた。

治療の術だ。それも、ろくに呪文の詠唱もなく、あれだけの傷を一瞬で治してしまった。

「ハンカチは洗って返すから、文句は言わないでよね」

「……。へ」

エアニスはバツの悪そうな顔で頭を搔く。

「足手まとって発言は取り消しとくよ」



真夜中の港街を、大きな買い物袋を抱え、二人は歩く。

街外れの倉庫街とはいえ、あれだけ暴れ回ったのだ。エリオットを倒した後、すぐに街の方角から警備兵がやって来て、エアニス達はこっそりとその場を後にしたのだ。

今頃、エリオットと密売組織の男達は捕らえられているだろう。

「……。今はエベネゼルの聖騎士なんだけど、元々は宮廷や軍の病院で、魔導医やってたんだ。私」

ずっと続いていた沈黙に耐えられなかったのか、チャイムがぼつりと、自分の過去を話し始めた。

「魔導医から剣士へ転職か。また極端だな」

まあね、とチャイムは笑い、

「こう見えても、エベネゼルじゃ天才一って呼ばれる程の魔法医だったんだから」

芝居がかった素振りで鼻を鳴らすチャイム。

「騎士も魔導医も……。お前には似合わないけどな」

「なんですって……。？」

じろりとチャイムに睨まれ、わざとらしく肩を震わせるエアニス。

エリオットを術で束縛した時も、自分の銃創を塞いだ時も、チャイムは呪文を口にしていなかった。それには一流の魔力と集中力が必要であり、その理屈はエアニスも熟知していた。これまでのチャイムのイメージからすれば信じられない事だが、それだけの技術を見せられては、彼女の腕の良さを信じるしかない。

「何で医者辞めて騎士なんかやってるんだ？」

チャイムは空を仰いで息を吐くように答えた。

「魔法医じゃ、傷付いていく人を守る事ができないから・・・」

チャイムの端的な答えに、エアニスは首を傾げる。

「魔法医はね、傷ついた人しか助けてあげる事ができないの。

でも、体の傷を治す事が出来ても、消えない傷はいっぱい残るの。

心に、ね」

トン、とチャイムは自分の胸を叩く。エアニスは黙ってチャイムの言葉に耳を傾けた。

「じゃあ、どうすれば誰も傷つかなくて済むのかなって考えたら、やっぱり、傷ついてゆく人を守れるようにならなくちゃって思っ

魔法医は傷ついた人しか助けられないけど、騎士は傷ついていく人を守ることができる。

だから、今は騎士として、人助けをしながら旅をしてるの」

そこで彼女は一度言葉を切ると、

「もう、傷付いてゆく人達を見ているだけなのは・・・嫌なの」

憂鬱な声で、そう呟いた。

彼女もこれまで、色々な物を見てきたのかもしれない。

これは、元々魔導医であったチャイム故の選択なのだろう。エアニスは何故チャイムが他人の厄介ごとくに無闇に首を突っ込みたがるのか理解が出来なかったが、今の彼女の話聞いて、彼女のことが少しだけ理解出来たような気がした。

「でも、ま・・・

そんなに上手く行くもんじゃないんだけどね・・・」

チャイムは空を仰ぎ、苦笑いを浮かべながら呟いた。自分の無力さを痛感しながら。悲しそうに呟いた。

「・・・へっ、」

エアニスは鼻で笑ったような、短い息を吐いた。

「何よソレ。馬鹿にしてんの・・・」

「いいや。

感心してんだよ」

「やっぱ馬鹿にして・・・」

「大した奴だよ、お前。

いい信念だと思う。聖騎士を名乗る資格は十分にあるんじゃないのか？」

チャイムの目をしっかりと見てエアニスは言う。いつものように茶化している訳でも、お世辞を言っている訳でもない。思ったままの事を素直に彼女へ告げた。

「む・・・。

・・・ありがとう」

なんとも微妙な気分だったが、チャイムは大人しくその言葉を受け取った。

「あ、でもあたしの魔法医としての腕は頼りにしないでよ」

「え？ どうしてだ？」

「あたしは今は騎士なんだから。騎士としてのあたしを頼りにしてほしいって事よ」

その言葉を聞いた途端、エアニスは興味を無くした様にそっぽを向く。

「・・・じゃあ、やっぱ足手まといか」

どがあっ！！

チャイムに買い物袋を思いきりぶつけられ、エアニスは石畳の上に転がった。

「あんたはケガしても治してやんないっ！！」

「ハッ、頼みやしねーよ！

俺に傷を付ける事が出来る奴なんて、そうはいないからな！」

「じゃあ今転んで擦りむいた、その手の傷は何よ？」

「これとソレとは話が別だ！」

「同じよ」

二人は飽きもせず不毛な口喧嘩を始める。仲裁するトキとレイチェルがいないので、言い争いはとどまる所を知らず、寝静まった街に二人の悪口が響き渡る。

港街の空は徐々に白じみ始め、少しだけ長かった夜がようやく明けようとしていた。

第15話 積み上げる矛盾

「あはははは。

早速チャイムさんと朝帰りとは隅に置けませんね、エアニス」

「お前、俺達のこの状態を見て、よくそんな事が言えるな・・・」

クマがかかった眠そうな目を引きつらせ、エアニスはトキを睨みつけた。

時刻は早朝。買出しに出ていたエアニスとチャイムは、ようやく宿に帰って来る事が出来た

。

「チャイム、帰ってきたの!？」

部屋の奥からレイチェルが飛び出してきて、二人の姿に息を呑む。

エアニスは返り血で服を汚し、チャイムは右腕を血まみれにしたまま買い物袋を抱えているのだ。

「あ、大丈夫よ。ケガはもう治ってるから」

「俺のコレは自分の血じゃないから」

二人は心配するな、と揃って手を横に振る。

昨晚からトキ達に何の連絡を入れずに、宿を出たままだったのだ。二人には心配をかけただろうと思い、安心させようと二人は必死で作り笑いを見せる。しかし説得力は無い。

「何があったんですか・・・？」

レイチェル心配そうに問いかける。

「別に、大した事じゃないよ。"石"の件とは別件だから。

悪かったな、連絡入れられなくて」

エアニスは買い物袋をテーブルに置き、汚れたローブを脱いで自室へ向かう。

「悪い。結局一睡もしてないんだ。ちょっと眠らせてくれ・・・」

トキ、船の乗船手続き、頼んだ・・・」

あくびをしながら隣の自室へ去って行った。

「一睡もしてないのは、僕もレイチェルさんも同じなんですけどねえ」

「あは、あはははっ・・・」

チャイムがトキの愚痴に乾いた笑いを上げる。

「ま、事情は気が向いたら聞かせてください。チャイムさんも、今は休んで。

後の事は僕が済ませておきますから」

トキはチャイムの買い物袋を受け取り、隣の部屋へ向かう。

「レイチェルさんも。やっと休めますね」

「でも、トキさんに全てお任せするのも・・・」

「気にしなくていいですよ。僕は船に乗ってから休ませて頂きますから」

毎度毎度、トキの気配りに頭が下がる。レイチェルは申し訳無さそうに微笑んだ。

トキが買い物袋を抱え自室に戻ると、エアニスがブーツも脱がずベッドに倒れ込んでいた。
「まったく……。エアニス、シーツを汚したら怒られちゃいますよ？」

トキがエアニスを揺さぶる。

「なあ、トキ。お前、人を殺す時、心が痛む事はあるか？」

「はい？ 何の話ですか、突然？」

「いいから答えろよ」

トキは顎に手を当てながら考える。

「そりゃあ、相手によりますけど……」

敵を倒すのに心を痛めるなんてウェットな感情は、遠の昔に壊れてますよ。僕は」

……いえ、初めからそのような物は無かった、と言う方が正しいのかもしれませんがね。

心の中で、トキはそう付け加えた。

「はは……」

俺もそうだと思ったんだけどなあ……」

「何かあったんですか？」

「チャイムの目の前で、人を斬った。

見ず知らずのクズどもだ」

「……それで？」

それが何て事も無いように、トキは言葉を促す。

「もの凄く後味が悪かった」

「……はあ」

そんな事を気に病むエアニスに、トキは内心驚いていた。

戦争中、数え切れない程の人間を手に掛けてきたエアニスが、こんな事で気分を悪くするとは思ってもみなかったのだ。

「"レナさん" との約束がまだ引っかかっているんですか？」

エアニスは驚いてベッドから半身を起す。

「いや、そうか。お前には話した事あったな……レナの事」

「もう誰も傷つけない、でしたっけ？」

……僕たちのような生き方をしてきた人間には、なかなか難しい事かもしれませんね」

トキは荷物から自分の黒いロングコートを取り出しながら言う。

「戦争が終わったとはいえ、こんな世の中です。周りがそれを許してはくれません」

「周りや時代の問題なのかね……」

「自分だけではどうにもならない問題ですよ。」

でもねエアニス。あなたの力はこの荒れた世界の役に立てるはずですよ。

誰も傷つける必要の無い世界を作る事に、エアニスの力は貢献していると思いますよ？」

「気に入らない奴を斬って捨てるだけの力がか？」

争いは争いを生むって言葉を知らない訳じゃないだろう？」

「エアニスの振るう正義っていうのは、それほど間違っていないと思いますけどね。」

これまでも、この世の害悪を的確に潰してきたのではないですか？」

トキの言葉をエアニスは鼻で笑い、静かな声で言い返した。

「俺にとっては、レナを奪ったこの世界全そのものが害悪だ」

絶句するトキ。

その言葉を口にした彼の周りで、空気がチリリと焼けたような気がした。

冗談、には聞こえなかった。

「・・・エアニス、本当に大丈夫ですか？

らしくないですよ？」

「いや、悪い。冗談だよ、忘れてくれ」

エアニスはすぐに普段の様子を取り戻し、ブーツを脱ぎ捨て毛布を手に取り、トキから顔を背けた。

「・・・じゃあ、僕は行きますね。早ければ昼過ぎの船には乗れますので、それまでしっかり休んでおいてください」

「悪いな。おやすみ」

ベッドから手を振るエアニス。トキは心配顔のまま、部屋を後にした。

部屋に一人になったエアニスは、天上を見つめながら、要らない事を喋ってしまったと、少し後悔する。

倉庫街からの帰り道でチャイムの話した事が、かつてエアニスが唯一剣を捧げた人を思い出させるのだ。

チャイムの甘い考えと尊い思想は、"彼女"に良く似ている。

しかし、その思い出は懐かしさよりも、悲しみ、寂しさ、そして憎悪と、負の感情ばかりを呼び起こす。

エアニスは腕を額に当て、自分の中で湧き上がる暗い感情を押し殺すように息を吐き、心を静めた。

やっぱり俺は、この世界を憎んでいるのかもしれない。

体は疲れているのだが、こんな気持ちの時に眠ると、また昔の嫌な夢を見てしまいそうだ。

エアニスはそれが怖く、結局眠る事が出来なかった。



それから5時間後の昼過ぎ。エアニス達は宿を後にし車で港へ向かった。

「すごい・・・！」

レイチェルは岸壁に立って感動の声を上げた。

「すごいって何が??」

「私、こんなに間近で海を見たの、初めてだから・・・」

その言葉に、エアニス達は驚く。

「そうか、エルカカは大陸の奥地だからな。初めて海を見るのか？」

「ずっと遠くからなら・・・見た事はあるんですけど・・・」

雄大で美しい海の眺めに気を取られ、エアニス達との会話などうわの空といった様子だ。海を見たと言う、ただそれだけの事にとっても嬉しそうなレイチェルが、妙に微笑ましかった。

「惜しいわねー。もうちょっと暖かければ泳げたのにねっ」

「あのな・・・いや、もういいや・・・」

エアニスが文句を言いかけるも、今は眠くてチャイムの言葉を咎める気にはなれなかった。

「この船の目的地であるアスラムは砂漠地帯です。

向こうなら、まだ泳げるくらいの暖かさはあると思いますよ？」

トキのアドバイスにチャイムの瞳が輝く。

「あ、そうか。じゃあさ、向こうに着いたら水着買って、ちょっと遊んでこうよ！

って、そいやレイチェルは泳げるの？」

「うん、エルカカには大きな湖があったから・・・」



無邪気にはしゃぐ二人を、エアニスは仏頂面で、トキはにこやかに眺める。

「・・・あのお二人、随分と元気になりましたね」

「元気すぎだ、アレは・・・」

エアニスは煙草に火を点けながら言う。

「でも、出会った時はお二人とも心身共に疲れ切った感じだったじゃないですか」

「・・・」

「良い事じゃないですか」

「・・・まあな」

苦笑い、といった表情で答えるエアニス。

チャイムに関しては昨晚の出来事で塞ぎ込んだりしないかと心配もしたが、そんな心配は無い

ようだ。

「それはそうと・・・エアニス」

「何だ？」

真顔になって話題を変えるトキ。

「やってくれましたね。街中大騒ぎですよ。

"大量銃器密売組織摘発！ 密売組織構成員を一斉検挙！

バイス=オルウェス議員が関与か？ 遺体となって発見！"

はいこれ、さっき街で配ってた号外です」

トキに渡された薄い新聞には、港の倉庫に密輸された銃が大量保管されていた事、そして組織の幹部達が一斉に逮捕されたという記事があり、この国の密輸組織を一網打尽にする足掛かりが出来た、という記事であった。

「聞くまでも無いですが、エアニスの仕業ですよ？」

「まあ、その、成行きで。

っつーか議員が関与って凄いな。でも遺体となって発見って・・・どういう事だ？」

「僕が知る訳無いでしょう。

大方、斬っちゃった人の中に居たんじゃないんですか？ その議員さんが。

ともかく、この街で銃を手に入れることは出来なくなっちゃいましたね・・・」

「いいだろ。別に」

「どこがですか？」

困り顔のトキ。自分の得意とする武器の調達が出来なくなったのだ。彼にとっては結構な懸念事項だ。

「これでまた一步、人を傷つけなくてもいい世界になったろ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべるエアニス。その言葉の前では、トキも目くじらを立てることはできなかった。

「まったく・・・都合の良い解釈ばかりして・・・」

「悪いか？」

「いいえ。

ただ、この騒ぎと僕達を、ルゴワールが結びつけて考えるのではないかと、少し心配になりましたね。

まあ、考え過ぎだとは思いますが・・・」

事件はレイチェルの"石"とは全く関係の無い所で起こっている。ルゴワールがこの騒ぎとエアニス達を結び付けるという事自体、考えにくい。もちろん宿帳への名前記入や、乗船手続きは4人とも偽名で通している。

「まあ、どのみちもう暫くしたら俺達は海の上だ。奴らも手は出せんさ」

「もし出せてしまうとしたら、船の上では袋の鼠ですよ？」

「・・・その時はその時だ」

トキの懸念を他人事のように切って捨てた。

「じゃ、俺は貨物室へ車を入れるから、トキたちは先に乗っててくれ」

「わかりました。

チャイムさ～ん、レイチェルさ～ん、行きますよー」

「ほーい！」

脳天気なチャイムの返事を聞きながら、エアニスと船員に指示されたドックへと車を走らせる

。

それから数分後、エアニス達を乗せた船は、ヴェネツィアの港を後にした。



「あれ？」

入港管理局で書類を書いていた職員が、疑問の声を上げた。

「おい、今出航して行った船って……マゼラン176号船、だよな？」

問われた女性の職員が双眼鏡を手にし、窓の外から見える今しがた出航した大陸間移動船を見る。

「そのようですが……どうかしましたか？」

「いや、176号船の出港手続きに関する書類が無いんだけど……。

新人の野郎、書類書き間違えたのか？」

「176号船の事は、忘れるんだ」

書類を捜す職員に、突然声を掛ける、年配の男。

「室長？ どういう事です？ 忘れろって……？」

「あの船に関する資料は全て破棄するんだ。

今日の分だけではない。過去の出航記録全て、今すぐだ」

非常識な指示を出す入港管理局の室長。流石にそのような指示に従う事は出来ず、職員は理由を問いただそうとする。しかし彼は、室長が顔色を失い額から汗を流している事に気付いた。

その様子にただ事ではない何かを感じ、抗議の言葉は飲み込まれた。

その日、ヴェネツィア港から一隻の船が、乗船員の名と共に記録から消えた。

トキは2人部屋の船室を2つ続きで取っていた。

大して広くもないし設備が整っているという訳でもないが、これでも見知らぬ人間と相部屋をする3段ベッドが押し込まれた船室の倍以上の金額を出している。

その一室。エアニスとトキの部屋に、チャイムとレイチェルは何をするでもなく居座っていた。

「暇ねー・・・」

「んー」

時刻は夜の8時。2人は船内を見て回ると、いきなりやる事が無くなってしまった。日が昇っているうちなら、ぼんやり海を眺めているだけでも退屈しないのだが、既に船の周りは灯り一つ無い夜の闇に包まれてしまっている。月明かりも乏しく、陸も水平線も空も何もかも真っ黒だった。

目的地のアスラムまであと7日。先は長い。

「暇になる事は分かってたけどさー。」

「あーあ、もっと暇潰し出来る物持ってこれば良かったなー」

チャイムは2段ベッドの1段目に腰をかけて背伸びをする。因みにそこはエアニスのベッドだったが、船室に彼の姿は無い。

「あ、そいえばレイチェル、船酔いは大丈夫なの？」

「うん、酔い止め飲んだから、なんとか・・・」

レイチェルはテーブルに頬杖をつきながら答える。彼女も安全な海の上に出た事で安心しているのか、今は緩んだ表情を見せている。しっかり者の珍しい一面に、チャイムは思わず笑ってしまう。

「あー、何か面白い事無いの、トキ？」

チャイムは頭上の2段目のベッドを下からゴンゴンと叩く。2段目のベッドでは徹夜明けのトキが眠っていた。

「・・・なんでお二人とも僕達の部屋にいるんですか？ 帰って下さいよ・・・」

「暇だし」

「勘弁してくださいよ、僕は昨日の朝からずーっと起きてたんですから・・・」

「優等生だからって寝るの早すぎるわよ。まだ8時だって！」

「僕にとっては38時くらいなんですけど・・・」

「あー・・・、じゃあ僕の荷物にトランプが入ってるので、お二人でどうぞ・・・」

「ホント？」

「用意いいじゃない。よっし、3人でやる！」

「えっ。いや僕は・・・」

「2人でトランプやったって楽しくないじゃない。

ほら、起きて起きて！」

「ちょっ、やめてくださいよ、あっ、あっ。」

チャイムはトキのベッドまで登ってきて無理矢理毛布を剥ぎ取ろうとするも、トキはそれにくるまりながら反抗する。

「おー、チャイム。

夜這いに来るにはまだ早くないか？」

ドアが開き、エアニスが部屋に戻ってきた。

「ななななっ、何が夜這いよ！！！」

「エアニス、助けてください。貞操の危機です」

「あんたっこの、エロメガネー！！！」

トキを枕でめった打ちにするチャイム。

「チャイム、トキさんは私達の為に寝ずに動いてくれてたんだよ。

あんまりわがまま言っちゃ悪いわよ」

「うー・・・分ったわよ・・・」

レイチェルにいさめられ、チャイムは渋々トキを解放する。途端にトキは団子のように毛布にくるまってしまった。

「暇なら丁度いい」

エアニスは手に持っていた物をチャイムに投げ渡す。

「うわ、お」

ガジャッ。

チャイムが受け取ったのは鞘に納まった剣だった。

「なに、これ」

「今日から剣術の稽古だ。アスラムまでの7日間を無駄にする事は無いだろ」

「・・・・・・・・・・は？」

不敵な笑みを浮かべるエアニスに、チャイムとレイチェルは呆けた声を上げた。



エアニスとチャイムとレイチェル、そしてトキは(結局起こされた)、人気の無くなった甲板へ上がり、機関室の屋根へ上った。

この場所ならそこその広さもあり、人目にも触れる事は無い。剣戟の音もエンジン音に紛れて目立たないだろう。

「はっきり言って、俺とトキだけでお前らを守りきる自信は無い。

四六時中一緒に行動してるワケじゃないからな。ある程度は自分の身を守れるようにはなって貰いたってのが本音だ」

ひゅうひゅうと冷たい風が吹きすさむ中、エアニスは淡々と稽古の趣旨を語る。

「まず、あんたらがどれだけ戦えるか知りたい。

自分のエモノでいい。俺を殺すくらいの勢いでかかってこい」

チャイムとレイチェルは顔を見合わせる。

二人とも、エアニスの半端ではない強さを知っている。そんな相手と戦うのは、稽古と言えど怖かった。

「そうだ、トキが言ってたぞ。レイチェル。

体術もロッドの扱いもなかなかのモノって話じゃねーか」

ニコリと笑い、エアニスは愛刀で自分の肩を叩く。びく、と肩を竦ませるレイチェル。

「エルカカの戦いのセンスは普通じゃない。

あんたも小さい頃から叩き込まれたクチだろ？」

「いえ、全然そんなこと無いですからっ。

昔から私ほんと一に、組み手とかって苦手で・・・」

「遠慮はいらないぞ。はっきり言って、俺は一発も貰うつもりは無いからな」

「うわっ、ムカツク」

チャイムは自信満々のエアニスの態度に思わず頬を引きつらせる。

しかしエアニスの戦い方を見る限り、チャイムにはエアニスに一撃を入れる事は、途方も無く難しい事に思えた。

レイチェルはエアニスの鋭い視線を受け止め、一度大きく深呼吸をすると、

「・・・わかりました。宜しくお願いします」

レイチェルは自分のハンマーロッドを両手に握り締め。一步前へ出た。その時チャイムには、レイチェルが不機嫌そうな顔をしているように見えた。

「・・・おや。レイチェルさんはひょっとして負けず嫌いとかですか？」

眠そうに目をこすりつつ、トキがチャイムに問う。こんな時でもちゃんと人の表情に注意を向けているトキがなんとなく嫌だった。

「さ、さあ。そんな事は無いと思うけど・・・。

えっと、レイチェル、とりあえずそいつの鼻っ柱へし折っちゃえ！！」

「外野うるせえ！！しばくぞ！！」

言いながら、エアニスも鞘に収めたままの剣を片手で構える。

4人の間に沈黙が落ちる。

エアニスとレイチェルは少しも動かない。ただの手合わせなのに、その2人の対峙を真剣に見入ってしまうチャイム。

先に動いたのは、レイチェル。

ハンマーロッドを何度か空転させると、その遠心力に乗ってエアニスへ駆け出した。

レイチェルの体を這うようにロッドは回転し、遠心力を無駄にする事無く流れるような動きでエアニスの体を狙う。

しかし、ただ遠心運動を繰り返すだけの単調な攻撃に、エアニスは動じることはなく冷静にハンマーの軌跡を読んで身をかかわす。

ど、ひゅんっ！

低い風斬り音と共にエアニスの目の前をハンマーが行き過ぎる。当たれば大怪我間違いなしの攻撃である。レイチェルはエアニスの言った通り、遠慮無しで戦っているようだ。その事に何故か笑みが浮かんでしまうエアニス。

ハンマーロッドは力が無くても、槌子の原理と遠心力が使い手の力を何倍にも増幅してくれる。剣や銃以上に技術の必要な武器だが、小柄で華奢なレイチェルにはうってつけの武器だと思った。

そんな事を考えていると、行き過ぎたハンマーの先端に続き、ロッドの柄がエアニスを狙って来た。先のハンマーの一撃から、ロッドが半回転するまで、コンマ一秒程度の間を置いて繰り出された瞬撃。

ガン！！

流れるような連撃をかかわしきれず、エアニスはロッドの柄を剣で弾く。予想外の攻撃だった。するとレイチェルはその弾かれた衝撃さえも利用し、再びハンマーの先端をエアニスの足元に繰り出す。

しかも、今までのような単調な攻撃ではない。遠心力を利用しつつも、レイチェルはロッドに繋がった二本の細い鎖を操り、攻撃の軌道を複雑なものに変化させている。

まるでロッドが意思を持っているかのようにエアニスへ襲い掛かる。

(マジでか・・・)

エアニスはようやくレイチェルの実力に気付いた。正直、手を抜いて攻撃を裁いていたが、慌てて頭を本気の戦闘状態に切り替える。

一瞬だけ足を浮かし、地を滑るようなハンマーの一撃をやり過ごす。そして、再び地に足を着けるエアニス。その瞬間、視界の端に何かが流れ、過ぎた。

がくんっ！

エアニスの足が、かわしたはずの一撃から僅かに遅れて払われる。ロッドに繋がったチェーンがエアニスの足を絡め取ったのだ。

「げっ！」

腰が地に付く前に、払われていない逆の足で必死に地を蹴り、レイチェルから距離を取ろうとするエアニス。しかしチェーンはエアニスの片足をしっかりと捕らえている。レイチェルがロッドに繋がったチェーンを思いきり引き寄せるとエアニスは完全にバランスを失い、遂に背中から地面に倒れた。

『うおおおおおおおっ！！！！』

思わず歓声を上げるトキとチャイム。

反射的にエアニスは足に巻きついたチェーンを引き寄せ、レイチェルの武器の自由を奪おうとした。しかし、チャイムは自らエアニスとの距離を詰め、ハンマーを振り下ろす。

ガキン！！

座りこんだまま、頭上でハンマーの一撃を受け止めるエアニス。次の連続攻撃に警戒し、ロッドの先端がどこに振るわれるかを警戒する。しかし。

とん。

レイチェルのか細い左手がエアニスの喉を突いた。

『あっ』

レイチェルを除く全員が間の抜けた声を上げた。

剣を頭上に構えたまま、思わず硬直するエアニス。何が起こったのか、全て理解していても、もはや後の祭り。敗因は完全に自分の油断である。

「手加減して貰ってるのは分かりますけど、加減を間違えると足元すくわれちゃいますよ？」レイチェルが、いつもより少しだけ強気な表情で勝利宣言をした。

「なんちゃって・・・その、ごめんなさい・・・」

レイチェルは自分の台詞に照れたように笑い、ぽりぽりと頭を搔く。一瞬見せた強気な表情は消え、いつもの謙虚なレイチェルの顔に戻っていた。

レイチェルを除く3人はあっけに取られ、言葉を無くしていた。トキとチャイムは腰を浮かせ腕を振り上げた応援ポーズのまま固まっていた。

「レイチェル、すごいっ！！」

黄色い声を上げてチャイムが大喜びしながらレイチェルに抱きつく。

「わっ。ちょっと、チャイムっ！」

「すごいすごい！！すごいすごいすごい！！！！」

レイチェルこんなに強かったんだ！！今、見ててぞくぞくしたわよ！！

ほら見て、トリ肌トリ肌！！」

チャイムは妙なテンションで舞い上がる。よっぽどレイチェルがかっこよく見えたのか、それともエアニスを負かしたのが嬉しかったのか。

レイチェルも満更ではなくホクホク顔をしていた。



「うむむむ・・・」

エアニスは右手で頭を掻き回しながら腰を上げる。

「あはははっ。油断大敵ですね。だから僕がいつも言ってるじゃないですか」

トキ苦笑いを浮かべつつエアニスの肩をぽんぽんと叩く。笑ってはいたが、トキも今の結末に驚愕していた。油断していたとはいえ、あのエアニスが一本取られたのだ。

確かにレイチェルは強かった。銃さえ持ち出されない限り、体術だけでルゴワールの刺客を軽くあしらえるだろう。

「レイチェル、お前これだけの腕持ってるのに何でルゴワールの下っ端供に追い回されてるんだ？

あのバルザックとかいう奴はともかく、奴の取り巻き程度ならお前の相手にはならなかったと思うぞ」

エアニスは複雑な表情でレイチェルに問う。何だか負け惜しみを言ってるような気分だったが、聞いておかねばいけない疑問だった。

「それは・・・実戦経験が、あまり無いからだと思います。

自分の命を狙って襲ってくる人も、自分が人を傷付けようとする行動を取るのも・・・怖いんです。

問答無用で魔導でドカン！って方法もありますけど、街中だと巻き添えが怖くてなかなか・・・」

「まあ、そりゃそうか」

いくら修練を積んでも、いざ命の関わる戦いになれば、よほど戦い慣れていない限りその実力を全て出し切るのは難しいだろう。あくまで修練という形だったからこそ、エアニスとの手合わせはレイチェルも思いきり攻める事ができたのだ。

「いやあ、見事な負けっぷりねー、エアニス」

チャイムがやたらと嬉しそうにエアニスの顔を覗き込む。

「・・・油断した。レイチェルがこれ程使えるとは思わなかったんだよ」

「いやいや、あたしはあれだけ大きなコト言うんだから、まさか負けるとは思ってなかったわよー。

ホント、油断大敵、ね」

まさに鬼の首を取ったかのようなチャイム。実際に取ったのはレイチェルなのだが。

エアニスはチャイムの嫌味に気を悪くする素振りも見せずに言う。

「油断大敵・・・ああ、そうだな。俺の悪い癖なのかもしれないな・・・。

じゃあ、お前との手合わせは、本気でやらせて貰うとするか」

「・・・・・・・・」

あれれ。そういう展開になっちゃうんだ・・・」

チャイムは自分の発言を激しく後悔する事になった。

ガシィインッ！！

エアニスに向かって繰り出されたチャイムの斬撃は、あっさりとエアニスに弾かれる。

「つく！」

大して強く弾かれた訳ではないのに、チャイムは大剣の重みにバランスを取られ、余分な足運びを見せる。そして体の軸がズレたまま、再びエアニスに斬りかかる。

じゃがっ

エアニスは半歩動いただけでチャイムの剣を受け流し、彼女は勢いあまってエアニスの懐に突っ込んでしまう。

エアニスはチャイムの腕を捕まえて支える。

「攻撃が大振りすぎる。相手にかわされやすいし、外してからのスキも大きくなる。

あまり剣の重さに頼るな」

短いアドバイスをすると、すぐにチャイムを突き飛ばし、元の間合いを取る。

「このっ！！」

短い呼吸を吐き、チャイムはエアニスの間合いに踏み込み突きを放った。それなりの速さを持った突きを、エアニスは難なく横にかわす。

しかし、チャイムはさらに踏み込み、突きを放った状態から横薙ぎの斬撃を放った。

ガンッ

しかし、エアニスの剣に簡単に受け止められる。

「攻撃の繋がりとしては悪くない。だが、二撃目に全然力が入っていないな。刃を潰したお前の

剣じゃ全く意味の無い攻撃だ。

それに」

がつっ！

「わっ！！」

エアニスは片足でチャイムの足を払う。あまりにも簡単に、チャイムの体は支えを無くし、床に尻餅をついてしまった。

「相手の間合いに踏み込みすぎだ」

エアニスはへたり込んだチャイムを、さっきの仕返しとばかりに轟然と見下ろした。

「くっっっそ〜！！！」

チャイムは髪を掻き耑りながら悔しがる。

「まずお前には、そのでかい剣は向いていない。

こんな重い剣、相当の豪腕じゃなきゃ上手く扱えないぞ。お前は力も無いし、体重も軽い。自分に合ったエモノ選びからスタートするんだな」

「む・・・」

それなりのアドバイスをしてくれるエアニスにむくれた顔で頷く。元々人のアドバイスは素直に聞ける性格なのだが、エアニスに対しては素直になれないチャイムだった。

「さっき渡した剣を使ってみろ。

使い易さではこのでかい剣よりずっとマシだろ」

言われてチャイムは、部屋でエアニスに渡された剣を鞘から抜く。そして、その剣の形に眉をひそめた。

長さや刀身の厚み、幅は普通の剣と同じである。しかし、剣の先端は扇状に広がっているという奇妙なデザインで、何より、この剣には、チャイムの大剣同様、刃がついていなかった。

「なによ、この剣・・・」

「"ボーンクラッシャー"って呼ばれる剣だ。人間の骨を砕くのを目的に、剣の重量、刃の鋭角が作られてる。

拷問室に備え付けられてタチの悪い使い方をされる剣だが・・・逆に言えば、人を殺さないように作られた剣だ」

「・・・呪われてたりしないわよね？」

エアニスの説明にますます顔をしかめるチャイム。

だが、剣の重さや長さは丁度良い。重さに頼った強烈な一撃には期待できないが、扇状に広がった剣先に適度な重みがあり、今まで使っていた大剣に使い感触がある。

チャイムはエアニスの言う通りこの剣を使ってみる事にした。

それから2時間後。

夜も更け、チャイムとレイチェルの体力が限界に差しかかった所で稽古の初日は終了した。

チャイムとレイチェルはゾンビのような足取りで船室に戻って行った。甲板に残ったのは、エアニスとトキの二人。

「また剣術指南とは、ガラにも無い事を始めたものですね」

「別に人を殺す技を教えるわけじゃない。あくまで、自分を守る為の術を教えてやってるだけだ」

トキが勘違いしているかもしれないと思い、エアニスは自分の考えをはっきりと言葉にしておいた。

「俺が誰かを守り通す事なんて、出来る訳ないんだからさ」

自嘲というよりは、寂しさを滲ませた声で、そう呟いた。

「もう、守らなくちゃいけない物は抱え込みたくなかったんだけどな・・・」

「・・・僕と一緒にいるのは、守る必要がないからですか？」

「お前は強いからな」

苦笑交じりのトキの問いかけに、エアニスは煙草を啜えながら笑って答えた。端的な言葉だったが、それは信頼を表した言葉。

エアニスはもう、誰かを失うという経験をしたくないのだ。



途方もない喪失感に打ちのめされ、いずれ失うものなら初めから何も求めないと誓ったあの日。

しかし、成行きでトキと行動を共にするようになり、今度はチャイムとレイチェルという、手の掛かりそうなお荷物を抱え込んでしまった。

たった数日一緒に居るだけだが、エアニスはもうあの2人に情が移り始めている。

情が移れば、失った時の哀しみは、大きい。

だから、彼女達には少しでも自分の身を守る技術を知って貰いたくて、エアニスは稽古を提案したのだ。

数え切れない程の人間を斬り、死に囲まれた世界で生きてきたエアニスだが、仲間の死というものにはいつまで経っても慣れる事ができなかった。

慣れる事が異常だとは思わなかった。だから、いずれ慣れると思っていた。心なんてさっさと壊れてしまえばいいのだと思っていた。しかし、エアニスの心はいらない所で頑丈に出来ているようで、いつまで経っても彼は人間らしい心を失う事は無かった。

だから、辛かった。

にも関わらず、また新たに人間と関わろうとしている自分は一体何を考えているのか。

(いや・・・寂しいから、なんだろうな)

エアニスは不本意にも沢山の人の優しさを知ってしまった。知ってしまった以上、それを忘れる事が出来なかった。だから、無意識のうちに人との交わりを求めてしまうのだろう。

(お前と会うまでは、こんな事で悩む事なんて無かったのにな・・・レナ)

エアニスに初めて本当の優しさを教えてくれた人を思い出し、自分を変えてくれた事に感謝する。

同時に、エアニスの冷え切った何も感じない心を、暖かくも傷付き易い、しかし絶対に壊れない心に変えてしまった彼女を、少しだけ恨んだ。

第17話 いつものできごと

雲一つ無い澄み切った青空。

そよぐ風も温かく、季節を逆行したようだ。

ヴェネツィアからアスラムへ向け出港して5日、肌寒かった秋の風に変化が出てきた。海水浴が出来るとまでは言わないが、薄着でも快適に過ごせる陽気だ。

「まるでバカンスに来てみたいねー」

チャイムは日陰のベンチに寝そべり、流れる景色(と言っても海しか無いのだが)を見つめながら呟く。バカンス気分の筈なのに、その声には元気が無い。

「これでエアニスの稽古が無ければ・・・言う事・・・無い・・・のに・・・」

チャイムは湿布だらけの体をレイチェルに揉んでもらいながら海を眺めていた。

別に怪我や打ち身をしている訳ではない。ただの筋肉痛である。

「お風呂入った時に、動かした所を揉んだり伸ばしたりしないと駄目よ？」

「うー・・・こんなにヒドイ筋肉痛は初めてよ・・・年かな？」

「年って・・・」

ヴェネツィアを出港してから、エアニスの剣術稽古は毎日続いている。内容は、単純。ひたすらエアニスと組み手である。それも、日が沈んでから4時間余り。

戦いの基礎が出来ているレイチェルはエアニスと実戦を繰り返し、チャイムはエアニスに剣術の基礎から叩き込まれていた。筋肉トレーニングといったものはしていないのに、これだけの筋肉痛である。原因はエアニスを相手取るが故の運動量と、チャイムの身のこなしにまだまだ余計な力が入っている事である。

「・・・なんでレイチェルはそんな涼しい顔してられるの・・・？」

チャイムはやや恨めしそうに、頭上にあるレイチェルの顔を見上げた。

「私は・・・少し組み手してから、エアニスさんやトキさんからアドバイス受けて終わりだけど・・・。チャイムは私よりずっと長い時間組み手してるじゃない。仕方ないわよ」

「あうう～」

確かにエアニスが稽古に割り当てる時間は、レイチェルよりもチャイムに多く取っている。レイチェルの腕は、初日の手合わせでエアニスにとっては合格点だったが、チャイムは全く駄目であった。

チャイムの腕前を理解したエアニスは、このままではヤバイと直感し、急遽チャイム特別強化合宿に切り替えたのだ。

「あたしそんなに弱いかな・・・」

内心、大きく傷ついているチャイムはぼそりと呟く。宮廷魔導師を辞め、騎士団に入ってから訓練は人並みにこなしてきたつもりだった。街にすっ転がるゴロツキなら2、3人まとめて相手どる自信もある。

しかし、エアニスやトキは常識から外れた強さを持っている。実力を発揮しきれてないとは

いえ、レイチェルも幼い頃から"石"を探す旅に備え修練を重ね、常人とは駆け離れた戦闘技術を持っていた。チャイムは4人の中で一番戦力にならない事を自覚する。

(あたしが役に立てるのは、やっぱり魔導で人の怪我を治す事しかないのかな・・・)

見切りをつけた全盛の頃を思い出し、今の自分の道を少しだけ疑う。

やはり自分が求められる場所は、ここにはないのだろうか、と。

「あっ」

チャイムは1フロア下の甲板に、エアニスとトキの姿を見つけた。2人で甲板の柵にもたれかかり、何か話している。頭上のチャイム達には気付いていないようだ。

「ちゃーんす・・・！」

チャイムは目を怪しく輝かせ、手近に立て掛けてあったデッキブラシを手を取った。

チャイムはエアニスとの稽古の合格条件とし、1発でもエアニスに攻撃を当てれば合格という、超甘い課題を課せられていた。それは夜の稽古の場だけではなく、昼間の平常時での不意撃ちでも良いとされていた。が、未だチャイムはエアニスにパンチ1発も入れられていない。

この稽古を始める前までは、頻繁にエアニスを殴ったりしていた気もするが、その課題を課せられてからはエアニスに触れる事すらも出来なくなってしまった。

談笑している最中にいきなり殴りかかってみた事もある。暗い通路で背後から襲いかかったこともあるし、昨晚は寝込みを襲ってみたが、布団にはどこから調達したのかダミー人形が寝かされていた。流石に風呂やトイレでの不意打ちには抵抗があったが、最後の手段として候補には入っている。

そして今。チャイムはエアニスの頭上にいる。頭上は人間の最大の死角でもあり、これまでの不意打ちパターンにも無いケースである。その機を逃すテは無い。

「見てなさいよ～っ、今日こそはっっ！！」

瞳の奥に炎を燃やすチャイムに、レイチェルは小さくため息をついた。



「どうですか？」

チャイムさんの上達ぶりは」

トキの問い掛けに、エアニスは煙草の煙を吐きながら答える。

「悪く無い・・・と思う。

あいつ、自覚してないみたいだけど、この短期間で身のこなしや反応速度はかなり上がってきてる。

俺が戦いのレベル釣り上げて行っても、すぐに付いてきやがるんだ」

「へえ。エアニス、いつもチャイムさんへの扱いがヒドイから、そんな風に思ってるとは思いませんでしたね。

上達してるんだったら、ちょっとくらい褒めてあげればいいじゃないですか」

「いや、アイツの性格見れば分かるだろ。

褒めれば舞がって、調子に乗り、怠慢に繋がる。アイツにはこういう扱いした方がいいの」
「あー・・・」

あはは。そうかもしれませんねえ」

「アレでも、エベネゼルの聖騎士団員らしいからな。

あいつ、アタマでは戦い方分かってるんだよ。ただ、それが体で覚わっていないだけ。

アタマの中の戦い方を実践する為のアドバイスをしてやればいい。それだけならまだ簡単だ」
「エアニスの教え方もいいと思いますよ。

教えると言うより、戦いのレベルを合わせるのが上手いとでも言いましょうか」

「そうかな。あいつの戦いに関する知識がしっかりしてたから俺も教えやすいんだ。

元々、アタマを使う仕事をしていたみたいだしな。戦いもイメージだけが先行しちまってるみたいだ」

「え。チャイムさん、騎士団に入る前は何かされてたんですか？」

つい口を滑らせ、エアニスは黙り込む。

そういえばチャイムは、魔導が使える事を隠している節があった。

「・・・直接本人に聞いてみる。

それより、レイチェルはどうだ」

話を誤魔化すため、同じ質問をトキに投げかける。最近のレイチェルの組み手は、トキが相手をしていた。

「驚きましたよ。あの年でウィザード級の魔導を扱えて、なおかつあれ程の体術でしょう。

エルカカの民ってというのはどういう集団ですか？」

「・・・奴らのご先祖の殆どが、石を探して世界中を旅して回ってた戦士と魔導士だ。

加えてあいつは伝説に名前が残る魔導士の子孫だからな」

「まあ、僕に言わせれば、勿体無い話ですがね」

「どういう意味だ？」

「あれだけの魔導が使えるなら、相手が銃を持ち出そうが戦車で攻めて来ようが、手段を選ばなければいくらでも対抗できる、とんでもなく大きな戦力です。

ですが、彼女は人を殺すのを・・・いえ、傷付けるのを嫌がる。

そのお陰で、せっかくの力を振るおうとしない。

全く、勿体無い話です」

「・・・そういう言い方するなよ」

「別に悪いと言ってる訳じゃないですよ。ただ、勿体無い、と」

「嫌な奴・・・」

トキは人の心や思いを考慮に入れず、現実的な物差しで事を計ろうとする。

エアニスはなかなか直らないトキの悪癖に、嫌悪の声を漏らした。

甲板を囲う柵に肘をかけトキから視線を逸らすと、突然、背後に気配が生まれた。

いや。これは背後でも、頭上に生まれた気配。

即座に気付いたエアニスは空を仰ぐ。そこには予想通り、1フロア上の甲板から身を躍らせ宙を舞うチャイムの姿。ロングスカートをはためかせながら、デッキブラシをめいっぱい振り上げていた。

エアニスに気付かれて表情を強張らせるチャイム。しかし、途中で止める事は出来ない。彼女は覚悟を決めたようにデッキブラシをエアニスに向けて振り下ろす。



「・・・！」

不覚にもエアニスの反応は遅れ、チャイムの攻撃を避ける事が出来なかった。身をかかわす事を諦め、両腕で振り下ろされたモップを挟み込んだ。そのままモップを掴み、まだ着地したばかりで不安定な姿勢のチャイムをモップごと振り飛ばす。

「うわへっ！！」

突然ゴロンと甲板に投げ出されたチャイムに、何も知らない乗客は驚いた顔をする。しかしその視線もお構い無しに、床を転がって服を汚した少女が飛び起きる。

「くっそ～っもうちょっとだったのにつ！！」

地団太を踏んで悔しがるチャイム。周囲の視線が痛い。

エアニスはチャイムから取り上げたデッキブラシをクルクルと回しながら、「お前の不意打ち、どんどん卑怯で、思い切りが良くなっくな・・・。褒めていい事なのか微妙だけど」

エアニスの微妙な賞賛はよそに、チャイムは腰に手を当て、首を捻った。
「そんな事よりあんた今、あたしに気付いた時一瞬動きが止まったでしょ？」

あれは何？あたしの不意打ちに驚いただけ？」

チャイムの疑問に、エアニスは舌を巻いた。

チャイムはあの一瞬でエアニスの表情を読み取ったのだ。戦いの中でも相手を見るといった事にも慣れてきているようだった。

それはさておき、チャイムに疑問を問われたエアニスは珍しく顔を赤らめながら答える。

「いや・・・流石にパンツ見せながら飛び掛って来られたら、戸惑う所もあるだろ」

「パ・・・」

バツ！と、反射的に自分の腰に手を当てた。

ああ・・・あたし今日はレギンス穿いてないや・・・。

みるみる顔から血の気が引いていったかと思うと、今度はすぐに顔を真っ赤に染めるチャイム。意味不明な叫び声を上げながらエアニスに掴みかかるも、俊敏な動きで身をかわすエアニスに張り手の一発も当てる事は出来なかった。暴れて疲れ果て、冷静さを取り戻した頃、チャイムは床にへたり込んだまま、さめざめと泣いた。

その可愛そうな姿を見たトキとレイチェルにエアニスは白い視線を向けられ、理不尽さを感じつつも彼はチャイムに頭を下げたのだった。

そんな、いつもの出来事。

4人はまだ出会って間もないが、そんな他愛無いやり取りが彼等の日常になりつつあった。

トキが心配していた船上での襲撃も無く、不穏な気配を感じる事も無い。4人は危機感を忘れて船旅を満喫していた。チャイムやレイチェルにとっては、稽古こそあるものの刺客に追われる事の無い久々の長休暇といった所だろうか。

船が目指すアスラムの港まで、あと2日。

その日の夜まで、平和な船旅が続いていた。

ブンッ

空気を裂く音と同時に、チャイムの鼻先をエアニスの斬っ先が行き過ぎる。

「ッ！！」

思わず両腕で顔を庇い、怯むチャイム。

「戦いの最中に眼を閉じるな。」

何があっても、全ての攻撃を見届けろ。眼を瞑る事は自分の命を諦める事だと思え」

「そんな、無茶な・・・っうわっ！」

そう言いながらもチャイムはエアニスの切っ先を紙一重でかわす。

エアニスとチャイムは、いつものように組み手をしていた。

トキとレイチェルの姿は無い。二人は既に船室に戻っている。チャイムだけの居残り訓練である。

「前もって言ってあるだろ。」

俺は絶対お前に攻撃は当てないって」

エアニスの握る剣は鞘から抜き放たれ、月明かりが薄い刃を照らしていた。今日は真剣を使って稽古をしているのだ。

「アタマでは分かってるけど・・・」

怖いのはしょうがないじゃない・・・びびるなっ！て方が無理よ」

今までは鞘に収めたままの剣や、木の棒を使って稽古をしていた。しかし、それでは実戦の緊張感が持てないと言う事で、今日から真剣を使った稽古を織り交ぜている。

予想通りチャイムの挙動には恐れの色が現れ、途端に動きが鈍くなった。

「まあ、慣れるまでは大変かもしれんが・・・。」

よし、じゃあ次は絶対に眼を閉じるなよ」

「う、うん」

「次の攻撃は、今と同じ、お前の鼻先を狙うからな」

「う、うん」

「絶対に当てないからな」

「う。うん？」

たんっ、と、エアニスが踏み込み、宣言通りチャイムの鼻先へ横薙ぎの斬撃を放つ。チャイムは必死でエアニスの剣先を眼で追い、エアニスの当てる意思が無い斬撃から1歩、遠ざかった。

しかし、チャイムの鼻先を行き過ぎる筈の斬撃が、思った以上にチャイムに迫る。

「ッ！！？」

チャイムは更に後退する為、必死に床を蹴った。

ざひゅんっ

後ろに跳んだだけでは足りず、背中をそらせて仰け反った鼻先を、エアニスの切っ先が行き過ぎた。頬を撫ぜた髪が数本、斬られて風に舞う。

どだんっ

跳んだ足が空を蹴り、チャイムは背中から甲板に倒れる。

今のは、避けていなかったら間違いなく死んでいた。

「ほら、やればできるじゃないか」

「なっ・・・・・・・・！！」

事も無げに言ったエアニスに対し、もう何度目か分からない怒りがこみ上げる。

エアニスは、わざとチャイムに当たる斬撃を放ったのだ。

「ふざけんじゃないわよっ、今のは、やり過っ・・・」

立ち上がって憤激するチャイムが、再びしゃがみ込んでしまった。

「どうした？」

「こ・・・腰抜けちゃった・・・」

「・・・・・・・・」

見ると、チャイムの手足と唇は小刻みに震えていた。本気で怖かったようだ。流石にエアニスもやり過ぎたか、と罪悪感を覚える。

「すまん、でも当てる気は無かった。今のだって、いつでも剣を止めれたんだからな。

・・・えー・・・休憩にするか」

「ああ、うん。そーして・・・」

一気に緊張の糸が切れ、エアニスへの怒りも霧散してしまったチャイムは、そのまま仰向けに寝そべってしまう。エアニスもその場に座り込み、ポケットの煙草を探す。



「・・・ねえ」

時が止まったかのような沈黙を、チャイムの声が動かした。

「ん？」

「もう一度聞いていい？」

ヴェネツィアの倉庫街で、あたしが聞いた事・・・」

エアニスは一瞬何の話か分からなかったが、チャイムに銃を持つ腕を押さえ付けられたあの時の事を思い出し、理解した。

どうしてそんなに簡単に人を殺せるのに

あなたは普段"殺さない"っていう選択肢を選ぶの？

答える義務はねーよ。

いつもの調子で言葉が口を突きかけたが、エアニスは倉庫街での事件の後、チャイムの身の上話を聞かされた事を思い出した。あくまで彼女が自ら話した事で、エアニスが無理に聞きだした

訳ではないのだが、ここで彼女の疑問を跳ね除けるのは彼女に対して不平等ではないかとも思った。

だから、エアニスもチャイムのように少しだけ昔の自分の事を話しておこうと思った。

「・・・もう誰も傷付けないで」

「え？」

「ある人に、そう言われた事があるんだ」

思いのほか素直に答えたエアニスに、チャイムは何うような視線を向ける。

「戦争中、俺はそいつに逢うまで、本当に人間の命なんて塵みたいに考えてたんだ。

何の価値もない、ただお互いに殺し合って、何も生み出さず、勝手に死んでいく。俺には人間が何の為に生きてるのか理解出来なかった」

まるで人間を見下すかのようなエアニスの物言いに、チャイムは違和感を覚える。

エアニスは話を続けた。

「とある仕事で、俺にとっては塵のような命を、必死で助けようとしてる人間と出会った。

成り行き上、暫くあいつと一緒にいる事になったんだが、どうにも・・・なんだ、その人間が、気に入っちゃってな。

初めて剣を、自分の為じゃなく人の為に振るおうって・・・思えたんだ。

でも、結局あいつに怒られたよ。

"誰も傷つけないで" ってな」

エアニスは懐かしそうな顔で、でも何処か虚しさを感じる笑みを浮かべながら言う。



「あいつは人を絶対に傷つけることは無かった。

人の世で生きている限り、少なからず誰かと衝突したり心を傷付け合う人はあるだろ？ でもあいつは、人一倍沢山の人間と関わっているのに、それが無かった。聖人みて一な奴だよ。

あいつは、俺にもそうなって欲しいんだって言ってたよ」

無茶言うなってのな。と、エアニスは笑った。

「誰も傷付けないなんて、誰がどう言おうと綺麗事だ。出来る訳が無い。あいつと出会った2年半前は戦争真っ只中で、そんな世の中でもなかった。

でも、アイツはそんな綺麗事を最後まで貫き通しやがった。俺に、見せ付けてくれた。だから俺も、アイツに応えなければいけないと思った」

こうして滔々と自分の想いが言葉になって出てくる事に、エアニスは内心驚いていた。これは、いつまで経っても自分の中にわだかまり続ける、整理する事も割り切ることの出来ない想いだっただ筈だ。それを言葉にして話す事が出来るという事は、彼自身気付かないうちにあの出来事を整理し、割り切ってしまったのだろうか。

考えてみれば、もう2年半も前の話だ。時の流れが解決してしまったのだろうか。エアニスの中で、風化してしまったのだろうか。

そんな思いに囚われ、そんな筈があるかと、エアニスはかぶりを振った。

気を取り直し、話を続ける。

「・・・それ以来、俺は出来る限り人の命を奪わないようにしている・・・つもりだ」

エアニスは自分の手を見下ろす。その思いの他白い手は、見えない真っ赤な血で染まっている。

。

「と言っても、その約束が守れているとはとても言えないがな」

自嘲気味に笑って、手を振って見せた。

その約束の後も、エアニスは数え切れない程の人間を斬って捨てているのだ。

「その人って・・・エアニスの大事な人？」

随分と俗な事を聞いて来たなとエアニスはチャイムを見遣ったが、彼女の表情は真剣そのものだった。エアニスを案じている色すらある。

「どうだろうな」

とはいえ、答えにくい質問だった。自分でも、良く分かっていないのだから。

だから、エアニスは煙に巻くような返事を返す。

「お前も知ってると思うぞ。

お前の国が、あいつの力を世の中に引っ張り出してきたんだからな」

エアニスはここで言葉を切ると、彼女の名前を久々に口にした。

「レナ=アシュフォード。エベネゼルではシスター・レナって呼ばれていた」

チャイムは絶句する。エベネゼルの宮廷でその名を知らない者は少ない。

「シスター・レナって、あの・・・!？」

エベネゼルの郊外で、どこの権力にも属さず、怪我人や病人を救いつづけた、凄腕の魔法医の名だった。貧しい人々にも分け隔てなくその力を与え、多くの人々が救いを求めて彼女の元へ訪れていたという。

「やっぱり知ってるか。お前がエベネゼルの魔法医だったなら、当然か」

しかしチャイムは、驚き以上に当惑して、自分の知っている事を話す。

「でも、シスター・レナは宮廷に呼ばれ、自分の住む村からエベネゼルに向かう途中に・・・」

チャイムは一度言葉を切り、

「・・・行方不明になってるわ」

レナという名の少女が有名になり、その有名人が宮廷へやってくると言われていた矢先、少女は忽然と姿を消してしまったのだ。

タイミング的な事も手伝って、当時エベネゼル国内でを騒がせた事件だった。彼女の名を知る者であれば、彼女が失踪したという事も当然のように知っている。

チャイムの認識を確かめると、エアニスが短く答える。

「レナは、その後すぐに死んでるよ」

何て事も無いように、事の結末を明かした。

行方不明の状態がずっと続いているのだ。その結末は誰しも予想していただろうが、何故エアニスがそのような事を知っているのか。

チャイムは小さく息を呑む。

「・・・どうして・・・？」

「知りたいか？」

エアニスは、どこか陰湿な笑みを浮かべる。

「エベネゼルが、ベクタにレナを売ったんだよ」

なるべく普段の口振りでそう言った。が、その言葉の奥には、壮絶な憎悪と憎しみを抱いていた。隠したつもりだったが、チャイムに感じ取られてしまったかもしれない。

ベクタとは、20年以上前に突如周辺諸国へ一斉侵略を始め、その後近年まで続いた世界大戦の火種となった国である。エベネゼルにとっても数少ない敵対関係にある国だ。チャイムは自分が信じて身を置く国が、そのような行為をしたとは思いたくなかった。

「どういう・・・事よ？」

「――・・・」

チャイムの疑問に、エアニスは答えられない。何かが詰まったかのように、喉から言葉が出てこなかったのだ。

思考が、止まる。これ以上の出来事を思い出し言葉にする事を、エアニスの頭が拒んでいるのだ。

エアニスは疲れたように息を吐く。

「まあ、こんな恨み節をお前に言った所で、仕方ないんだけどな。」

気を悪くしたなら、謝る」

フン、と鼻を鳴らし、エアニスは立ち上がる。

「なんか・・・冷めちまったな。今日の稽古はこれで終わりにするか」

剣を担いで船室に戻ろうとするエアニスの服を、チャイムが掴んだ。彼女は真剣な目で、エアニスを見上げていた。

「あたしは自分の道を、自分の国を信じてるわ。エベネゼルが掲げる理想や信念があるからこそ、私は魔法医や騎士として、生きていこうと誓った。それは、誰にも間違っているとは言わせないわ」

突然、そんな事を言われた。チャイムは真摯そのものといった表情でエアニスの瞳を見つめる。

「別にお前が間違っているとは言ってない・・・」

「でも、本当にエベネゼルのせいで、エアニスの大切な人が命を落としたと言うのなら、エアニスがエベネゼルを許せないという気持ちは分かるわ。

それなら、あなたはどうすればエベネゼルを許す事が出来るの？

私はあんに、何をすればいいの？」

エアニスは戸惑う。くそ、余計な事を話すんじゃなかった、と、心の中で毒づきながら、チャイムに返す言葉を搜した。

許すも何も、だから、それは全て終わった事なのだ。復讐も、そして後悔も終わっている。今更何かをして誰かが救われる事など無い。

それならばと、エアニスは一つの要望を挙げる。救いようのない過去にではなく、これから如何様にもなる未来への要望だ。

「・・・それじゃあ、お前は死ぬな。

この旅の最後をお前が見届けるまで、死ななければいい。

俺の目の前でくたばらなければ、それでいい」

「・・・そう」

暫しの沈黙の後、静かに答えるチャイム。

次の瞬間

ガイィン！！

チャイムの"ボーンクラッシャー"は、エアニスが咄嗟に構えた剣を打っていた。

「ってえ！なにしやがる！？」

「稽古の続きッ！！」

エアニスの怒声を上回る声量でチャイムが言い返した。エアニスは呆気にとられる。

「あんたが言い出した事でしょーがっ！！最後まで稽古付き合いなさいよっ！！」

言いながらも切っ先をエアニスへ叩きつける。

ひゅんっ

エアニスは鞘から抜き放った剣を、チャイムの胴へ向けて、そして振り抜いた。

チャイムは体をねじり身かわし、エアニスの剣は空しく空を斬った。チャイムの動きがまた一段と鋭さを増したような気がした。

「・・・なんだ、今頃になって火が点いたか？」

「少しでも強くなっておかないと、今の約束守れなくなっちゃうかもしれないからね！」

不敵な笑みを浮かべるチャイムに、エアニスも同じ表情で返す。

「そうだな・・・

・・・頼むぜ！！」

その返事を合図に、2人は再び稽古を再開した。

(つつく・・・弱いくせに、頼もしい女だな・・・)

剣を振るいながら、エアニスは苦笑するのであった。



轟々と鳴り響く、船のエンジン音。

客室にまでその音と振動は伝わっており、初めは眠る時に気になってしまったが、慣れてしまえば、ある種の子守唄や揺り籠のように感じてしまうのが不思議だった。

2段ベッドの1段目で、チャイムは寝付けずに寝返りをうった。

稽古の時のエアニスの話が気になっているのだ。

特に、エアニスがシスター・レナの事を話す時の表情が、チャイムを落ち着かない気持ちにさせた。

寂しさと、悲しさと、懐かしさを混ぜ合わせたような。

エアニスが、とても弱そうに見えた。

(やだな・・・何でこんなに引っかかるんだろ・・・)

チャイムは再び寝返りをうった。

ズドオオオン！！！！

突然、船を大きな衝撃が襲った。

チャイムとレイチェルはベットから飛び起き、一瞬にして最悪の展開を予感した。言葉も無く二人は上着を羽織り、チャイムは剣を、レイチェルはハンマーロッドを握り、船室を飛び出す。通路には既にいつものローブを纏ったエアニスと、赤黒いコートを羽織ったトキの姿があった。他の乗客も、何事かと船室から顔を覗かせている。

「いくぞ。上だ」

顎で階段を指し、駆け出すエアニス。3人も無言でその後が続いた。

「何よ・・・これ！？」

甲板に上がったチャイムが見たものは、船体に巨大な鎖が突き刺さっている異様な光景だった。

相手の船の動きを止めるためのアンカー・フックだ。その鎖の先を見ると、暗闇の海に、小さな明かりが点々と灯っている。

「レイチェル、明かりの魔導で海を照らしてくれるか？」

「は、はい・・・！」

レイチェルは呪文の詠唱も無しに、ハンマーロッドの先に明かりの球を作り出し、ロッドを振るい空に打ち上げた。

ばしゅん・・・

明かりの球は弾け、照明弾のような強烈な光で周囲の海を照らした。

巨大な鎖の先は、鋼鉄で覆われた1隻の中型戦艦に繋がっていた。それと同じ型の船が、今見えるだけで2隻。まだ船の反対側にいるかもしれない。

海賊にしては金のかかっている船だ。国の海軍なら、このような乱暴な真似はしない。ならば、あれは何か。

考えるまでも無い。"石"を狙う、ルゴワールの船だ。

「これはこれは・・・僕達の為に艦隊まで用意してくれるとは、頭が下がりますね」

「ふん・・・」

トキにとってもエアニスにとっても、予想外ではあった。たった4人の人間のために軍艦を何隻も引っ張り出してくるなど馬鹿けている。

確かに、海の上での襲撃はどれだけ派手な事をして、その騒ぎを船の中だけに留める事が出来る。街中での襲撃は、一度ヘタを打つとその騒ぎの広まりに上限は無い。事実、彼等はミルフイストでの襲撃でエアニスとトキの力を見誤り、街中での発砲や爆破、トラックの暴走に、果ては建築物の倒壊まで引き起こしている。それによりどれだけルゴワールの立場が危うくなったかは知らないが、それに懲りての判断かもしれない。

船が一隻行方不明になったという事実は残るが、これならば彼らも全力でエアニスと戦う事が出来る。

そう。敵はこの船もろともエアニス達を始末するつもりなのだ。

チャイムとレイチェルは、突然の襲撃に動揺していた。久しく感じなかった恐怖。心臓は破裂しそうな程激しく鼓動し、口の中はいつの間にかカラカラになっていた。

「大丈夫か？」

エアニスの問いかけに、我に戻るチャイムとレイチェル。

「まあ・・・心配するな。どうにかしてみせるさ」

ぱちん、と、ライターの蓋を閉じ、煙草の煙を吐いて笑った。

普段のエアニスなら、"どうにでもなるさ"と、投げやりな言葉が出ていたかもしれない。それよりも僅かに意思を感じさせる今の言葉は、かえって彼にとっては弱気な言葉だったのかもしれない。しかし、いつもの余裕の表情は健在だ。

「・・・うん」

チャイムとレイチェルは、エアニスとトキの言葉に力を貰って、強く頷いた。

「やれやれ・・・戦争中を思い出すねえ」

「ですね。久しぶりに、いい運動ができそうです」

エアニスは鞘から剣を抜き放ち、トキも銃とナイフをコートから抜いた。

深夜の船内に響いた突然の轟音。

大勢の乗船客が甲板へ様子を見に来ており、船に突き刺さった巨大な鎖と、レイチェルの放った明りに照らされる軍艦を見て騒然としていた。

ドシュー

軍艦の船主が白い煙を噴き出した。

ヒュルヒュルと空気を裂く音が近づいて来たと思ったら、エアニス達の頭上を低い唸り声を上げて巨大な鎖が横切って行った。チャイムが身を竦ませる。

ずがじゃあああっっ！！

鎖は轟音を上げてエアニス達から離れた場所に落ちた。鎖の先端には巨大な鉤爪が繋がっており、それが甲板を抉り船体のフレームを掴む。鎖の先は、1隻の戦艦の砲座に繋がっていた。相手の船の動きを止めるアンカー・フックだ。

それに驚いた乗客達は一斉にパニックに陥り、甲板は一気に騒がしくなった。船員達が乗客に船内に戻るようにと声を張り上げているが、誰も聞いてはいない。

「さて、どうするかは、お前に任せた方がいいかな？」

エアニスは周りの騒ぎを全く気にする素振りも見せず、トキに言う。

丸投げですか？と、トキはわざとらしく肩をすくめた。トキは眼鏡に中指を当て、

「じきに彼等はこの船に直接乗り込んで来ますね。レイチェルさんの身柄と"石"が目的なら、いきなり船を撃沈したりするつもりはないでしょうし。

となると・・・」

トキは明りに照らされた戦艦を見る。どうやら中型の戦艦3隻でこの船を囲んでいるようだ。

「あのタイプの船なら乗員は20名程。どれだけ兵隊を乗せているかは分かりませんが、1隻に乗り移って船を乗っ取る事は容易かと思えます」

「簡単に言うねえ。

でも、乗っ取ったとしても、残りの3隻から逃げ切れるか？」

「他の船は乗っ取った船の砲で沈めましょう。逃げるよりは簡単でしょう」

ドガァァァン！！

鼓膜が痛む程の爆音を上げて船尾が爆発し、船が激しく揺さぶられた。一瞬遅れて熱い熱風がエアニス達に届く。

砲撃の音は無かった。爆発したのは魚雷か、移動式の機雷だろう。船底に穴があいてしまっただろうが、船体がアンカーフックで捕らえられている以上沈没する事は無い筈だ。

「舵とスクリューが潰された様ですし、向こうの船を奪うしか道は無いと思えますよ？」

「そうだなあ。陸まで泳いで行くのは大変そうだしなあ」

耳の穴を揉みながら二人は話を進める。

「ちょっと待ってよ、他の乗客はどうするのよ!？」

チャイムが声を上げた。エアニスとトキの口振りは、自分達が逃げる方法しか考えていないように聞こえたのだ。

「・・・流石にこの船の乗客全員までは・・・」

トキは言葉を選びながらチャイムに言葉を掛けると、

「心配すんな。この船の乗客くらいなら、なんとかあの戦艦1隻に乗せられるだろう」

トキの言葉を遮りエアニスがチャイムの意思を汲んだ。トキは驚きエアニスを見て、そして笑いながら、やれやれと大袈裟に首を振った。

甲板を埋めるざわめきに、悲鳴と銃声が混じった。

「!!」

向くと、逆弦の甲板で黒い潜水服をとマスクを身につけた異様な風体の男達が乗客達に銃を乱射している。

「野郎っ!」

だんっ

エアニスが弾丸のように飛び出す。驚異的な跳躍力で群集の頭上を飛び越え、船の外壁を蹴り、騒ぎの真っ只中へ一瞬で飛び込む。

チャイム達からエアニスの姿が人込みに紛れて見えなくなってすぐに。

その場所から血飛沫が上がった。

エアニスが斬り倒したのは3人の銃を持った男達。敵艦隊からゴムボートでこの船まで近づき、甲板まで登ってきたのだ。

3人の刺客達と共に、銃で撃たれた数人の乗客達も倒れ伏している。チャイムは慌てて倒れた一人の女性を抱き起こすも、既に息は無かった。

「俺達がやらなきゃ、こいつらは無関係な人間も次々と殺すぞ」

エアニスが血で濡れた剣を下げて、チャイムに言った。

「お前もまだ言うのか」

こんなクズどもを、傷つけるなって」

そう言いながらも、今から何人この手に掛けないといけないかと思うと、エアニスの心に罪悪感が生まれる。

唇を噛み、自分で口にした言葉に葛藤する。

昔はこんな気持ちになる事なかったのに。

レナと出逢うまでは、人を殺す事など、紙を丸めて捨てる事と同じ様な事だったのに。

(誰も傷つけないで)

エアニスの脳裏にあの時の言葉が鮮明に蘇る。

「レナとの約束は忘れない。

でも・・・だからといって、こんな奴らに好き勝手させる訳にはいかない」

それは、エアニスが自分に言い聞かせているようにも聞こえた。
チャームは、撃たれた女性から流れ出る真っ赤な血を見つめる。
大切な約束を守る事が出来ず、殺し続けなければならないエアニスに掛ける言葉が、見つからない。

「やれやれ、人手不足もいいところです」

トキがコートの裾をひるがえし、周りを見回す。

「他の乗客の面倒も見るのでしたら・・・」

エアニスは、ここに残ってお二人と乗客を守ってください。

船の制圧は、僕の方でやってみます」

トキの言葉にチャームとレイチェルは耳を疑った。

「トキさん、まさか一人で船に乗り込むつもりですか！！？」

「ええ、そのまさか、です。

心配しないでください。僕はエアニスのように強くはありませんが、しぶとさなら負けない自信がありますからね」

そう言ってにこりと笑みを浮かべる。作り物じみた、いつもの笑みを。

そのトキの後ろ。少し離れた場所に、潜水服を着た男が2人、銃を構えこちらを向いていた。

「トキさん、後ろっ！！」

レイチェルの言葉も終わらないうちにレイチェルはトキにコートで包み込まれた。

どどんっ

「！！」

トキの体に銃弾が撃ち込まれた衝撃が、レイチェルにも伝わってきた。しかし、トキはそれに全く構わず、振り向き様に自分を撃った男達に、1発ずつ銃弾を打ち込む。頭を撃ち抜かれた男達は仰け反り、そのまま海へ落ちていってしまった。

「トキ、さ・・・」

「大丈夫ですよ」

レイチェルの震える声を遮りトキが笑った。トキがレイチェルに背中を見せると、そこには潰れた銃弾が2つ食込んでいた。が、トキが怪我をしている様子は無い。

「このコートは特別製なんです」

「・・・っ！」

何処かで。トキは、レイチェルが何処かで聞いた事のある台詞を言った。

トキは彼女の動揺に気付いたが、今はそれを気にしている暇は無さそうだ。コートに食い込み潰れた銃弾を引き抜いて床に捨てる。

「さてと。悠長にしている暇は無さそうですね」

そうしているうちに、甲板には潜水服を着た刺客達が次々と現れた。海を泳いで船底に取り付き、ワイヤーフックとモーター仕掛けのリールを使い、あっという間に甲板まで登って来る

のだ。

エアニスは溜息をつく。

「俺はその作戦に文句は無いが・・・お前本当に一人で船乗っ取れるのか？」

「任せてください。武器も揃っていますし、船の中のような狭い場所での戦いは、僕の専門分野です」

「・・・まあ、そうだったな」

エアニスは苦笑しながら頷く。チャイムとレイチェルには、意味の分からない話だった。

「頼んだぞ。俺達は船内の入り口で籠城する」

「良い策とは言えませんが、まあたった3人で乗客を守るならそれしか無いでしょうね」

そう言うと、トキは船体に突き刺さる巨大な鎖の上に登った。1コマが子供の背丈ほどもある鎖だ。やや曲芸じみているが、その上を歩く事は不可能ではない。

「僕はこれを伝って、あの戦艦を抑えに行きます。用意が出来ましたら、照明弾で合図するので、乗客を避難させる準備をしてください」

「ああ、分かった。あまりはしゃぐなよ？」

「あははは。エアニスこそ」

そう言葉を交わし、エアニスは船室の入り口に向けて走り出す。

「・・・トキさん、気をつけて」

エアニスの背を追って走り出すレイチェルは、振り向いてトキに声を掛ける。トキはいつものようににへら、と笑って見せた。

「さて・・・と。

面倒な役回りを引き受けてしまいましたね」

エアニス達の姿が見えなくなると、トキはコートの内側にしまっていたフードを被り、腰と首元のベルトを締めて、全身をコートで包んだ。

「さすがに、コレが無いと危ないですか」

コートの胸元から取り出した物を見つめる。

それは、白く飾り気の無い仮面。

「・・・この格好は、レイチェルさんに見せられませんね」

眼鏡を外し、自嘲気味の笑みを仮面で隠したトキは、巨大な鎖の上を駆け出す。

その姿は、レイチェルの村を襲った黒ずくめ達と、同じ姿だった。



船に侵入した潜水服の男達は、周りの乗客に向けて銃弾を放とうとする。しかし、引き金を引くよりも早くエアニスのライフルに腹を撃ち抜かれ、あるいはレイチェルによる風の魔導で吹き飛ばされ、海へと落とされる。

しかし、敵と守るべき者の数が多すぎる。エアニス達の手の届かない場所で、幾つもの悲鳴と銃声が上がっていた。

甲板に居た乗客達は船室の中へ逃げ込もうと、数少ない扉へ殺到する。エアニス達は乗客を守りながら、彼らを船の中へと誘導する。

逃げ惑う乗客達のしんがりについて入り口まで辿り着くと、そこには小さな拳銃を持った警備兵が怯えた表情で立っていた。

「き、君達も！早く船内に避難・・・」

警備兵の震えた声を無視し、エアニスは肩に掛けていたカバンから小型の機関銃と大量の手榴弾を取り出した。ギョッと目を剥く警備兵。チャイム達はもはや驚かない。

「お前邪魔だ、船の中に引っ込んでろ。連中は俺が食い止めてやるから」

ガシャコンと機関銃に弾を詰めると、身を隠していた壁から半身を乗り出し、近づいてきた敵に向けて引き金を引く。頼りない小さな銃身とは裏腹に、それは凶悪な鉄の暴風雨を巻き起こし刺客達を次々と撃ち倒す。その迫力に、逃げ腰になっていた警備兵は腰を抜かす。

「わ、わかった・・・我々は、船内に避難した乗客たちの護衛に回る・・・！」

それだけ言うと、警備兵は逃げるように船の奥へ降りていった。

「ほ、ほんとにあんな、銃を持った集団をあなし達だけで相手にするの・・・」

これほどまでの危機的状況に初めて遭遇するチャイムは、恐怖を紛らわすかのように口を動かす。しかし、手足と声の震えは止まらない。

「お前らは手をだすな。俺一人で十分だ」

「ちょ・・・！」

さも当然の様にエアニスが言い放った。

チャイムはいくらエアニスが強いといっても、流石にそれは無茶だと思った。たった一人で何十人という銃を持った刺客を相手にするのだ。

「無茶よっ、アンタもトキも、何考えてるのよ！！」

死にに行く気！！」

チャイムがエアニスの服を掴んだ。こう話している間にも、銃弾がエアニス達が隠れた壁を削っていく。そして弾幕は徐々に厚くなっているようだ。敵が集まりだしている。

「んな気ねーよ。大袈裟だな。

こんな状況、俺もトキも慣れっこなんだよ」

はっきり言って、お前ら邪魔。そう言って彼は、チャイムの額を小突いた。

「お前らは船内に連中が入り込まないように見張ってろ。この入り口と、自分の身を守る事だけを考えて、余計な事はすんな。何かあったら大声で呼べよ」

エアニスは床に転がした手榴弾を一つ拾い上げ、ピンを抜き入り口の外へ放り投げた。

一瞬遅れて響く轟音。火薬の量を減らしてあったのか、爆発は甲板の床板を少し焦がした程度の規模だった。だが、刺客達の攻撃の手を緩めるには十分で、途切れた弾幕をすり抜けエアニスは再び敵の真正面へ飛び出した。

「エアニスっ！！」

「チャイム、危ないっ！」

エアニスを追おうとしたチャイムをレイチェルが止めた。

「ターゲットの一人だ、撃て！！」

エアニスの突撃に気づいた一人が声を上げ、刺客達がエアニスに向け一斉射撃を行う。

するとエアニスは、刺客達へ向かい駆けながらも踊るように身を反らせ、屈みこみ、ステップを踏み跳ねて、彼等との距離を詰める。

「・・・！！？」

どういう訳か、彼らの銃弾はエアニスに当たる事はなかった。

銃弾の雨の中、エアニスは目の前の刺客たちに機関銃を向ける。

「あぐっ！」「がっ！！」「ぎああ！！」

エアニスがでたらめにばら撒いた銃弾が、刺客達の胸に、足に、頭に、面白いように当たる。足に銃弾を受けた刺客の一人が正面に視線を戻すと、目の前には剣を振りかぶったエアニスの姿。あっという間に、剣の間合いにまで踏み込まれていた。

気付いた時には、並んで銃を構えていた刺客の3人が、エアニスの一太刀で同時に斬り倒されていた。

「信じらんない・・・」

チャームとレイチェルは入り口より少し奥に入った場所から、エアニスの戦いを見ていた。相変わらず刺客はエアニスに向けて銃を乱射している。しかし、その銃弾は彼らの仲間当たる事はあっても、エアニスに当たる様子は無かった。

エアニスは突然後ろへ跳ねたり、体を屈ませたりしながら剣を振るっている。一見意味の無い動きに見えるが、それは刺客の銃撃をかわしているのだ。無意味に見える動きの度に、エアニスの周りの床や壁に次々と穴が穿たれてゆく。

「銃の弾が・・・見えているとでもいうの・・・？」

エアニスの非常識な強さも、ここまで来ると異常である。ひょっとしたら、何らかの魔導を使っているのかもしれない。そうでないと、この現象の説明が付かない。本当に銃弾が視えてでもない限りは。

「違う・・・」

レイチェルが、冷静にエアニスの動きを分析する。

「視えているんじゃないくて、まるで何処に銃弾が飛んでくるのかが分かっているみたい・・・」

エアニスの視線は常に今から切り倒す刺客へと向けられており、周りの刺客の銃口を気にしている様子は無い。そう。レイチェルの言う通り、あらかじめ何処に銃弾が来るのか、分かっているかのような動きだった。

エアニスに焼け付くような殺気が次々と突き刺さる。

しかし、エアニスに向けられた"殺意"は、物理的な現象として彼に届くよりも早く、見切られ、いなされ、かわされる。刺客達はまるで幻か幽霊と戦っているような気分だった。

船の制圧の為乗り込んだ30人の刺客達はたった1人の男に、たった5分足らずの時間で、その数を半分以下にまで減らされていた。

まさか銃を持った集団に単身斬り込んでくるとは思っていなかったのだろう。刺客達の武器は銃しかなく、接近戦に持ち込まれると、どうしても同士撃ちをしてしまう。何人もの刺客達がエアニスを狙った仲間の流れ弾に当たり、倒れていた。刺客達はそれを恐れて益々弾幕を薄くしてしまい、自然とエアニスの刺客を斬り倒すペースが上がってゆく。

(楽勝だな)

一人の刺客の胸を斬り払い、エアニスは思う。

戦争中は、このような状況はよくある事だった。30人という敵の数も、大して多いと感じない。

雑魚がいくら集まろうと、鯨の喉が食い千切られる事はないのだ。

「ッ！！？」

突然、雑魚の中からとびきり鋭い殺気が生まれた。

ジャギィイインッ！

エアニス は 視界の端で辛うじて捕らえた刃を剣で受け流しながら、殺気から距離を取る。そして、その姿を認めた。

「お前は・・・」

「ハハッ、また会えたな！」

そこに居たのは赤い髪を海水で濡らした見覚えのある男。

「たしか・・・バルザックとか言ったな。こんな所までご苦労な事だ」

赤毛の男は、ミルフィストの宿でチャイム達を襲った襲撃者達のリーダー、バルザックだった。街でエアニスと戦い、決着が付かずに逃がしてしまった凄腕の剣士。そして魔導師でもあった。

「どういう事だ、どうしてお前が居る？」

こいつらは、"ルゴワール"の連中じゃないのか？」

「そうだ、我々"エイザム"が"ルゴワール"にお前達の事を報告した。

だが、お前の様な最高の獲物を他所にくれてやるには惜しかったからな。

わざわざこうして、"ルゴワール"の雇われ兵士とし会いに来てやったんだよ！！」

バルザックは一足跳びでエアニスの間合いへと踏み込み、二人は耳障りな金属音を上げて手にした刃を交差させる。バルザックが笑った。

バチヂヂッ！

エアニスとバルザックの間に青白い火花が弾ける。バルザックが短剣を媒介に電撃の魔導を使ったのだ。しかし、エアニスの持つ剣に電撃が伝わる事は無い。単に絶縁処理がしてある、という訳ではない。エアニスの剣は魔導への耐性があるのだ。

「・・・雷撃が伝わらない事といい、ミルフィストで火炎の術を弾き飛ばした事といい、たいした魔法剣だな」

バルザックは羨望の眼差しでエアニスの左手に握られる、赤黒い長剣を見つめる。

「凶に乗るな。人間如きに振えるエモノじゃねーよ！」

更に踏み込み、バルザックの肩口を狙ってエアニスは剣を振り下ろした。バルザックは両手の2本の短剣でエアニスの斬撃を受け止める。二人の剣の動きが止まった。

「悪いが今日はお前と遊んでる暇は無いんだよ」

エアニスは空いている右手の機関銃をバルザックの腹部に押し付け、零距离から銃弾を撃ち込む。バルザックの背中が震え、血と肉を撒き散らした。

卑怯だとは思わない。元より、エアニスにバルザックと剣の勝負をするつもりなど無いのだから。

ざぎんっ

エアニスの右手が小さく揺れた。手元の機関銃に視線を落とすと、それは銃身の半ばから真っ二つに断ち斬られていた。

「！！？」

猛烈な胸騒ぎを覚え、エアニスはバルザックから離れようとする。しかし、腹部を蜂の巣にされながらもバルザックは異様な力でエアニスの襟を掴む。

「――っ！ しつこい！！」

エアニスは剣を逆手に持ち替え、バルザックの脇を刺した。剣は両の肺と心臓を貫抜き、肋骨を折って反対側へと抜けた。

しかし。

バルザックは動いていた。

彼は自分の胸を貫いた剣を掴み、エアニスの剣の動きを止める。そして、痛みなど感じていないかのように、平然と笑った。

バルザックの異常行動に動揺し、エアニスの動きが止まる。その隙を突くようにバルザックは短剣をエアニスの喉元目掛けて突き出した。

エアニスの肉が裂け、血が噴き出す。

第20話 剣士の性

1隻の旅客船を囲む3隻の中型戦艦。その1隻の甲板上で、2人の兵士が銃を肩に掛け、暇そうに立っている。

「たった4人を捕まえるだけに、よくもまあこれだけの金をかけるよな、上の連中もよ……」

「よく知らねえが、それだけの価値のお宝を持ってるらしいぜ、そいつら」

隣に同じ服装で立つ兵士も、同じように気の抜けた声で話す。

「例の女どもを護衛してる奴らは、化け物じみた強さをしてるらしいぞ。」

なんでも、ミルフリストで奴らを捕まえようとした、ルゴワールの孫組織……何ていったかな？

とにかく、そいつらが20人がかりで捕らえにかかったらしが、返り討ちにあったって噂だ。

しかも、全員に銃を持たせていたのにも関わらず、だ」

「そんな馬鹿な話があるか」

片割れの兵士は、全く聞く耳持たずといった風情でその噂を聞き流した。それを話した兵士自身も信じていないのか、そりゃそうだ、と笑った。

「……それにしても、随分と静かになったな」

包囲した旅客船からはいつの間にか銃声一つ聞こえなくなっていた。ほんの数分前までは、連続した銃声がここまで響いていたというのに。

「たった4人を捕らえるくらいなら、この程度だろ。そろそろ撤収準備にかかるか」

欠伸を噛み殺しながら言う兵士。その時、もう1人の兵士が何の気無しに海に向けた目を、僅かに細めた。

「おい、アンカーフックのチェーンに……！」

「あ？」

今、この船の砲門から伸びる巨大な鎖は、数百メートル離れた標的の旅客船に突き刺さり、この戦艦と繋がっている。兵士はその鎖の中程を指差し、戸惑いの声を上げた。

もう一人の兵士はそれに視線を向け、そして目を剥いた。

海の上を伝う巨大な鎖の上を、コートで身を包んだ人間が、走っているのだ。

「なっなんだ、ありゃあ！！」

「敵に決まってるだろ、撃て！ 海に落としてやれ！！」

二人は肩に掛けたライフルを鎖の上を走る男に向けて発砲する。

ばす、ぼっ！

「！？」

二人の兵士は、喉元が軽い音を立ててはぜ割れるのを感じた。

鎖の上の影が撃ってきたのだ。

ごぶりと喉が泡立ち、意識が闇に落ちる。

「何だ今の銃声は！？」

数人の兵士達が、銃声の起きた甲板へと駆けつけた。

そこには赤黒いコートで全身を覆った人間が立っていた。目深に被ったフードからは白い仮面が覗き、異様な雰囲気のを漂わせている。その足元には、2人の見張りが喉から血を流して倒れていた。

「侵入者だ！！」

その声と同時に、その場に居た兵士達から一斉射撃を受けるコートの男。

しかし、無数の銃弾は男の体を僅かに揺る程度の事しかできなかった。コートに当たった銃弾は火花と煙を上げて潰れ、床にバラバラと落ちる。

「・・・お、おい！こいつ、どうなってやがる！！？」

その光景に、兵士達は引き金を引きながら動揺と恐怖が入り混じった声を上げる。

コートの男は全身に銃弾の雨を浴びながら、両腕をゆるりと上げる。その手には黒光りする拳銃が握られている。

ばす、ぼっ、ばん、

コートの男の放つ銃弾は、小さな発砲音と共に兵士達の咽喉に一発ずつ飛び込んだ。

兵士の数だけ銃弾を放ち、その場に立つのはコートを纏った仮面の男だけとなった。

周囲に静寂が戻る。人間味と現実味が欠片も無いその人影は、まるで人を殺す為の機械人形のように見えた。そんな機械人形が突然、人間臭く溜息をつき肩を竦める。

「やれやれ・・・やっぱり向いてるんですかね。こういう仕事の方が」

コートの男は、トキの声でそう呟いた。



エアニスの右肩に、バルザックの短剣が食い込んでいた。

刃はローブの下に着込んだ防弾服を貫通している。余程の力で突き刺されない限り、剣でこのような真似は出来ない。

エアニスに腹部を何十発も銃で撃たれ、胸を真横から串刺しにされているバルザックに、それだけの力が残っているとは思えなかった。

「がっ・・・！！」

バルザックが突き立てた剣を捻り、エアニスの口から思わず声が漏れた。

彼はバルザックの胴から剣を引き抜くと、短剣を持つバルザックの右腕を斬り飛ばした。

エアニスはバルザックから遠ざかり、肩に刺さった剣を引き抜く。慌てて右手で傷口を押さえた。

「・・・エアニス！？」

「エアニスさん！」

異変に気付き、船内から状況を見守っていたチャイムとレイチェルが隠れていた壁から飛び出す。

「来るなっ！！」

エアニスの大声に、チャイム達は身を竦ませ立ち止まる。

「・・・大したことないから・・・心配すんな」

エアニスはそう言いながら、目の前の生きている筈も無い赤い人影を見据えた。

彼はまだ立っている。自らの血溜りの中に。

バルザックが大量の血を吐き出した。肩を震わせ咳き込み、息が落ち着いた頃にゆっくりと顔を上げる。

「酷いじゃないか。剣と剣の勝負じゃなかったのか？」

バルザックは体の傷をものともせず喋った。

「お前・・・」

エアニスはバルザックが思った程、驚いている様子が無かった。むしろ、同情にも似た表情を見せている。それがバルザックを不機嫌にさせた。

「ちょっとした魔導を使っているのさ。すこしくらいの事じゃ、死なない体になっているんだ」

バルザックは、エアニスに斬り飛ばされた自分の腕を拾い上げ、切断面を自分の腕に合わせる。斬られた筈の腕はそれだけで繋がったのか、指先がモゾリと動いた。蜂の巣にされた筈の腹部からも、出血は止まっている。

普通の魔導では、こんな無茶な事は出来ない。しかし、これと似た事ができる魔導を、エアニスは知っていた。苦々しく、哀れむような声色で、その正体を口にする。

「生ける屍・・・か」

「屍などと呼ぶな。首が繋がっている限り、自我はあるんだ」

バルザックは笑い、エアニスの言葉を肯定する。

魔導の使えないエアニスだったが、それなりに魔導の知識は持っている。

生ける屍。

彼らは体がある限り、痛みを感じる事無く動き続ける。新陳代謝能力を損なわず、脳が活動している限りは、普通の人間と何ら変わる所は無い。しかし、いずれ彼らは肉を腐らせ、自我を失う。その末路は酷いものだ。人の形をした獣と成り果てる。

人の尊厳を踏み躪る、決して使ってはいけない邪法中の邪法。しかし、この魔導を使えば不死身の軍隊をいくらでも量産できる。死体から"生ける屍"を作る事も可能なのだ。戦場に死体など文字通り腐る程あるのだから、材料には困らない。戦争という状況下では、非常に有用な術なのだ。実際エアニスも、戦場で使役される彼等を見た事がある。

相当の魔力と魔導技術を持ち、なおかつ人外の倫理観を持つ者でないと術を発動させる事は出来ない。禁術にあたるため、術のプロセスを記した魔導書も簡単には手に入らず、もし使えるという事が分かれば、今ではそれだけで賞金首になってしまう。

今となってはこの術を使う事が出来るのは極少数の人間のみである。

「施術者は誰だ？ お前が自分で使ったのか？」

「まさか。

"ルゴワール"の魔導師にやってもらったのさ」

ギリッと歯軋りをするエアニス。

「奴らに利用されてるだけだぞ。不死身と言っても、その体じゃ遠くないうちに自我を失う。分かってるのか？」

敵だと分かっている、バルザックに哀れみを感じるエアニス。しかし。

「構わん。お前のような最高の使い手と存分に戦えるなら、そんな事などどうでもいさ」
バルザックが凄絶な笑みを浮かべた。

「貴様はとんでもない化物だ」

「・・・誰が化物だ」

「ミルフリストで剣を交えてすぐに気付いたよ。お前の、常識から一歩だけ外側に居る、イカれた強さにな。

お前は、俺よりずっと強い・・・がだ、根本はきっと俺と同じだ。

いつ死んでも構わないという目を・・・している」

エアニスは口を噤む。

世界には、常識という一線から逸脱した強さを持つ者がいる。そういった者達は、大概メンタルという側面でも常識から外れている事が多い。

人生を犠牲にして己に課せられた使命を全うしようと力を磨き続ける者。

生まれながらにして人間らしい感情を一切植え付けられず、人としての枷から解放された者。

そしてエアニスのように、自分の命を軽んじ死線を日常の一部とした者。

人間の常識から外れた思考を持つが故に、やがてその力までもが人間の常識から外れる者は少なからず居る。

「俺と同じような奴には初めて会った、だから、嬉しかったよ」

バルザックは狂気じみた笑顔を浮かべる。しかし、その目は狂気などに支配などされていない。それはまるで、ようやく望む物を見つける事の出来た歓喜に震える探求者の目だ。

「俺の体や、未来の事なんてどうでもいい！！」

俺にとってはお前と全力で戦える事が何よりも変えがたい喜びなんだよォ！！！！」

エアニスの心の奥がカッと熱くなった。バルザックに一瞬抱いた哀れみの念など、すでにどこかへ吹き飛んでしまった。自分でも良く分からない感情。でもそれは、きっと今バルザックが抱いている感情と同じ物のような気がした。

「そうかい・・・それは光栄だな。

なら、全力で戦わなくちゃ、失礼か」

バルザックの言葉は、エアニスにとっては最高の賛辞だ。

誰がどう見てもバルザックは狂っている。エアニスも、そう思う。だがその根底に、剣士として強さを求めるバルザックの信念がある以上、エアニスはそれに向き合わなくてははいけないと思

った。

彼の気持ちが、分かるから。



「・・・続けようか。茶を濁して悪かったな」

エアニスは機関銃を放り投げ、左手の剣を構え直した。

「ああ・・・そうだな」

バルザックも剣を拾い上げ、エアニスに向き直った。

エアニスとバルザックは甲板の上で剣を交える。

いつの間にかエアニスは、チャイムとレイチェルを守るという役目を忘れ、バルザックとの戦いに夢中になっていた。全てを投げうってまで自分と戦う事を望む敵。その狂気に、エアニスは真剣に向き合う。

バルザックの動きは衰える事は無かった。むしろ、徐々にその力も身のこなしも鋭くなってゆく。"生ける屍"の術で、身体機能が壊れ始めているのだ。人間は、自分の体を壊さないよう本能的に力のリミッターが作用している。バルザックはその力の制御が出来なくなっているのだ。バ

ルザックが剣を振るう度、彼の関節と筋肉がメキメキと鳴いている。

しかしバルザックはとても楽しそうに剣を振るう。

そして、エアニスも。

エアニスは、これだけ純粋に戦う事を楽しむ敵に、久し振りに出会った。

そして、自分と、同じ性質を持つ人間に、初めて会った。

ガイン！

ギジャァン！！

両者の剣が火花を散らし、ぶつかり合う。散った火の粉が甲板を飛び跳ねた。

元々エアニスの腕力は人並み程度で、常人離れの瞬発力で斬撃の鋭さを高めていたが、右肩が動かない事と思うように剣に力を込めることが出来ずにいた。

剣のぶつかり合いに押し負け、体の軸が振れた。そこを狙い、バルザックの突きがエアニスの脇腹を狙う。

エアニスは体を半回転させて突きをかわし、その勢いを利用し鉄板の入った硬いブーツをバルザックの即頭部に叩き込んだ。普通なら脳を揺さぶられる程の衝撃に、バルザックは怯む事なく剣を振るい続ける。

(くそっ、ここまでこずるとはな・・・)

エアニスは苦笑いを浮かべて思う。ここまで本気で戦える相手には、戦争が終わってからは初めて会ったかもしれない。不死身の体がある事を抜きにしても、バルザックは強い。

「ッ！？」

エアニスの蹴りによって切れた額から血が流れ、バルザックの右目を塞ぐ。

絶好の好機と見取ったエアニスは、バルザックが失った右側の視界に飛び込む。バルザックはエアニスを見失い、慌てて視線を巡らす。左目の端に、風になびく琥珀の長髪が見えた。

ききんっ

バルザックの両手に軽い衝撃が走ったかと思うと、突然手から剣の重みが消えた。見ると、両手の短剣は根元から切り飛ばされていた。

「・・・！」

バルザックは首筋と左腕をエアニスに捕まれ、足を払われた。うつ伏せに甲板に倒れ込むバルザック。その背中へエアニスがバルザックを押しえつけるように跨った。

二人の剣士は動きを止める。バルザックはエアニスに押しえ付けられたまま抵抗しない。背後を取られ、剣を失ったのだ。バルザックの負けは明らかだった。暫く二人の乱れた息遣いだけが続く。

「もう・・・十分楽しんだか？」

エアニスはバルザックを押しえつけたまま問いかける。バルザックは大きな溜息をついた後、小さく笑った。

「ああ、最高だ。お前と、戦えた事を・・・光荣に思う」

いつの間にか、バルザックの瞳から光が消えかけようとしていた。体の損傷と出血で、脳の活動が止まりかけているのだろうか。自我を失い、人の形をした獣になるのも時間の問題のようだ。

「・・・俺もだ。久し振りに楽しめた。

ありがとよ」

エアニスバルザックの延髄に剣を押し当て、力を込める。

バルザックの四肢から力が抜けていった。

第21話 覚めて見る悪夢

エアニスは動かなくなったバルザックから手を離す。

首から下の脊髄を絶ってやれば、"生ける屍"となっても、動き出す事は無い。わざわざ体を押さえ込み最小限の傷でバルザックを仕留めたのは、エアニスなりのバルザックへの敬意だった。

「くそ・・・後味悪いな・・・」

エアニスにとっても最高に楽しい戦いだった筈なのに、何とも言えない不快感が残った。当然負ける訳にはいかなかったうえ、バルザックを倒す事は彼を醜い不死から開放する事でもあった。

エアニスは最良の結末を出した筈だ。

しかし、割り切れないものが心に残った。

「ルゴワール・・・」

エアニスは、レイチェルを付け狙う組織の名を呟いた。

ガンンッ！

「痛えっ！！」

頭に衝撃が走ったと思うと、足元に"頭上注意"と書かれた薄い看板が転がっていた。看板の飛んできた方を見ると、

「馬鹿エアニス！！」

あんた私達の護衛でしょーがーっ！！」

チャイムとレイチェルが生き残っていた兵士達に囲まれ、窮地に立たされていた。

「やっべ。忘れてた」

兵士達がバルザックとエアニスの戦いに手出しが出来ずにボーッと突っ立っている所までは見ていたが、エアニスが戦いに集中している間に彼等は職務を思い出し、とりあえずチャイム達に襲い掛かっていたようだ。エアニスは慌ててチャイムとレイチェルに加勢する。



一方、トキが乗り込んだ中型戦艦では、得体の知れない敵の侵入に騒然としていた。

「どうなってるんだ、侵入者はまだ見つからないのかっ！！」

司令官だろうか、壮年の男が狭いブリッジで声を張り上げる。その声に、計器に向かう乗組員達は司令官の期待に応えることは出来ず、絶望的な報告をする。

「船内の通信機器、全て、不通です・・・」

様子を見に行かせた護衛兵の無線も、応答がありません・・・

現在、船内の状況は、このブリッジ以外、何も分からない状態です」

「・・・」

司令官の頬を脂汗が伝う。異変が始まってから、まだ1時間と経っていない。そんな短時間で、船はまともに機能しない状態へと陥ってしまったのだ。

頭の中が真っ白になり、何も言えずにブリッジの中央で立ち尽くす司令官の男。
船の駆動音だけがゴウンゴウンと響いていた。

ポガンッ！

突然ブリッジに破裂音が響いた。ロックされた鉄扉が内側に弾け飛び、煙を上げる小さな物体が飛び込んできたのだ。その煙に男達は反射的に口元を押さえる。催涙ガスだ。

ブリッジに誰かが入ってきた。司令官の滲む視界には、その姿はマントを着た人間としか分からない。

パン、パン、と軽い銃声が響いた。その音に続くように聞こえる人のうめき声と、どさり、という鈍い音。状況が見えなくても、それが侵入者の襲撃だと言う事は容易に想像できた。目を拭いながら腰から銃を抜き放つ。司令官の男が握る銃は、分厚い鉄板をも打ち抜ける火力を持った大型銃だ。

バゴッ！！

腹に響く轟音と共に飛び出した銃弾が、マントの男の眉間に当たる。侵入者は仰け反り、背中から倒れ伏した。

突然訪れた静寂。

司令官の男は窓を開けて外の空気を吸った。ガスを室内から逃がし、視界の戻ったブリッジの中を見回す。

自分以外の乗組員は皆、血を流して倒れ伏していた。そして、それに混じって横たわる赤黒いコートを纏った一人の人間。

司令官の男は銃を構えたまま、その侵入者に歩み寄る。

「な・・・！！」

司令官の男は、その侵入者の姿に見覚えがあった。色は違っているものの、見覚えのある分厚いコート。そして、フードから覗く、白いデスマスク。

「何故・・・ルゴワールの暗殺者がここにいる・・・！？」

「貴方はこの姿を知っているのですね？」

「ッ！！！」

突然、倒れていた侵入者が首を持ち上げて喋った。反射的に司令官は侵入者に向けて発砲する。銃弾はコートの男の肩や側頭部に当たるが、男はそのまま起き上がり、おもむろに司令官の銃身を握り締めた。

「ひあああっ！！」

「"ワグナス277"ですか。良い銃をお持ちで。

眉間に当たった弾、結構痛かったですよ？」

デスマスクが落ち着いた声で語りかける。

「お前は・・・お前は何者だ、ルゴワールの者なのか・・・？」

銃を握られた司令官は、震える声を絞り出して問う。

「ああ、僕はもう組織の人間じゃ無いんですよ」

男は握った銃身を司令官のこめかみに押し当てた。

「そうですね・・・ただのしがない復讐者と言った所でしょうか」

そして司令官の震える指に手を添え、そっと引き金を引かせた。



レイチェルの魔導が最後の刺客を倒し、ようやくエアニス達の戦いは終わった。

周りの気配を慎重に探り、敵がもう居ない事を確認してから、エアニスは腰を下ろす。

「随分てこずったな」

煙草を取り出し、反対の手で火を点けようとした所で、エアニスは自分の右肩がまともに上がらなくなっている事を思い出した。

「見せて」

エアニスの傍らにチャイムがしゃがみ込む。

「いいのか？」

何となくレイチェルを見るエアニス。その視線を察してチャイムは言う。

「レイチェルもあたしの素性は知ってるわ。別に、魔法医のコト隠してる訳じゃないし。

ただ、都合よくあたしの力を頼りにされるのが嫌なだけ。でも、あんた達にはそんな心配無用みたいだからね」

「あ、そう・・・」

エアニスはどうでもいいように相槌をうち、視線を逸らせた。左手で煙草を咥え、左手で火を点ける。

「トキさん・・・大丈夫でしょうか・・・？」

レイチェルが心配そうにトキの乗り込んだ戦艦を見る。遠目では、全く変わった様子は無い。爆発が起きているわけでもなく、煙が上がっている様子も無い。

「アイツの仕事は綺麗だからな」

分かりづらい事を言うエアニス。

動じた様子が無いところを見ると、トキの事は全く心配していないようだ。

その横では、チャイムがエアニスの右肩に両手を当て、治療の術をかけている。温かい感触がエアニスの肩を包む。痛みは既に消えており、傷口も塞がりかけていた。

エアニスの傷は骨まで達していた。チャイムが居なかったら、魔法医の居る町まで行かなければならない所だった。

「お前等は、怪我は無いのか？」

「あたしもレイチェルも、あんた程じゃ無いわよ」

良く見ればチャイムもレイチェルもあちこちに小さな傷を作っていた。銃弾の破片などに当たったような傷だ。大きな怪我は無さそうだ。

ふと気付くと、レイチェルがぼんやりと遠くを見つめている。その顔色はあまり良くない。

「レイチェル、大丈夫か？」

「顔色が悪いぞ」

びくん、と身を竦ませ、エアニスに視線を向けるレイチェル。

「ええ、・・・その、・・・大丈夫です。なんでも、ありません・・・」

歯切れの悪いレイチェルの応えに眉を寄せるエアニス。

「・・・こんな状況で平気なカオしてられるのは、あんたくらいよ」

チャイムに言われてエアニスは、そりゃそうかもな、と、鈍い自分の頭を小突いた。

累々と横たわる死体。所々に血溜りが広がり、無数の赤い足跡が甲板を汚していた。チャイムは魔法医として働いていたのならば、これまでも無残な戦場の姿を見た事があるだろう。しかしレイチェルは、この光景に馴染みが無いのだ。

「お前が選んだ道だろ」

俯くレイチェル。エアニスの言う通りだ。

「じきに慣れる」

エアニスの無神経な言葉に何か言ってやろうと思ったチャイムだったが、言葉が浮かばない。

確かに、この道しか、エアニス達には無かったのだ。

「あーあ、

もうやっつけられちゃったんだ」

突然降って湧いた女の声に、チャイムとレイチェル、エアニスまでもが飛び上がり、辺りを見回す。

「上！！」

エアニスはレイチェルの声に視線を巡らすと、2階の甲板の柵に銀髪の少女が腰掛けていた。その隣には銀髪の少女と似た印象の、同じく銀髪の男がエアニス達を見下ろしている。

ざわっ

エアニスの肌が泡立つ。

(いつの間に・・・)

反射的に剣を構え、距離を取った。

全く、気配を、存在を感じなかった。しかし、今は目の前の2人の存在を感じる事が出来る。この世の異物のような存在を。



銀髪の少女が、ふわり、とエアニス達の前へ降りてきた。

何かの魔導を使っているか、まるで体重を感じさせない羽毛のような動きだった。

一緒に居た男も、2階の甲板から飛び降りる。こちらは普通に床をダンッ、と鳴らして着地する。

銀髪の少女は、この場に似つかわしくないゴシック調の短いドレスに身を包んでいた。黒に近い群青と白を基調にした、ドレスといってもヒラヒラしていない動きやすそうな服装だった。艶やかで綺麗な銀髪は、頭の左右で二つに分けて結わえている。年の頃はレイチェルと同じ年か、それ以下か。幼いといった印象すら受ける。そして、誰もが振り返る小さくて可愛いらしいその顔には、人を小馬鹿にしたような浅い笑みが浮かんでいた。

一緒にいる男は、少女のドレスと同じ色調のロングコートを羽織っている。年齢は20代半ば、といったところか。少女と同じ色の銀髪は後ろに撫で付けられ、切れ長の瞳を持つ端正な顔をしていた。顔を見るだけでは線の細い印象を受けるが、がっしりとした体躯をしており、コートの下からは大振りの大剣が覗いている。

髪の色と服装の印象が同じなので、兄と妹といった関係にも見えた。

「ふうん・・・」

銀髪の少女がエアニス達を面白そうに、まじまじと見つめる。

「噂どおり、イイ男じゃない」

チャイムは「はあ？」と、呆れた様に口を開く。

「人間にしてはけっこうできるみたいだけど・・・」

「どうしょっか、イビス？」

イビスと呼ばれた男は、感情を感じさせない静かな声で答える。

「男は好きにすればいい。

俺達が用のあるのは、エレクトラの子孫だけだ」

イビスの冷たい視線が、レイチェルを射抜く。

その視線に、レイチェルは違和感を覚えた。彼等から感じられる雰囲気、空気感が、何とも表現し辛い"違和感"を感じるのだ。まるで、目の前にいるのに、そこに居ないような感覚。

その違和感はエアニスも感じていた。そして、エアニスは彼等と同じ空気感を持つ者と過去に一度、会った事がある。

その経験を元に、彼等の正体を推測する。

「・・・お前達、向こう側の人間か？」

エアニスの問いかけに、銀髪の少女は目を丸く、イビスと呼ばれた男は目を細めた。

「レッド・エデンの人間かと聞いている」

エアニスの言葉に、レイチェルは何処か納得したかのような気分になって、そして息を呑んだ。

250年前。レイチェルの先祖であるエレクトラという魔導師が、魔族を封印したと言われる此処とは別の世界、"レッド・エデン"。

レイチェルは、稀にレッドエデンからこの世界へと戻ってくる魔族や、250年前に追放されずこの世界に留まったままの魔族が、少なからず存在しているという話を聞いていた。世間では眉唾物の噂として扱われているが、エルカカの民はそれが真実だという事を知っている。

「ふーん。

あなた、私達の事知ってるの？」

アイビスは俄然興味が沸いたとでも言うように、エアニスに視線を送る。

「戦争中、あんたらのお仲間に出会ったよ」

「あらそう？ だあれ？」

「・・・あー。いや、名前は忘れた。でも、斬り捨てやったよ」

「へえ・・・」

銀髪の少女、アイビスは面白そうに唇をなぞる。まるで、新しい遊び道具を見つけたような目だ。

「ちょっと・・・エアニス・・・」

「どういう事よ??」

状況についていけないチャイムは小声でエアニスに聞く。

「・・・離れておけ」

エアニスも小声で返した。

「やばいぞ。魔族が出てくるなんて想定外だ。それに二人も・・・」

普段の口調で言いながらも、エアニスは焦っていた。冗談ではなく、戦う事より逃げる事を考え始めていた。

しかし、こんな何も無い海の上で、何処へ？

エアニスは自分に問い掛ける。

そんなエアニスの心境を読み取ったのか、アイビスが笑った。

「おっと、逃げちゃ駄目よ」

アイビスがパチンと指を鳴らした。

ざざざああああっ

まるで操り人形のように、エアニス達の周りの死体が、立ち上がった。

「ひっ！」

チャイムは思わず声を漏らし、エアニスの腕を掴む。

エアニスが斬り倒し、明らかにこと切れている刺客達が血を流しながら、首を異様な角度に曲げながら、ガクガクと震えて銃を構えた。刺客達に撃ち殺された乗客達までもが、操り人形のように不自然な姿で立っている。エアニスが、チャイムにも聞こえるような歯軋りをした。

「"生ける屍"・・・

お前がバルザックをそそのかしたのか！」

アイビスはキョトンと目をしばたたかせた後、すぐに何の事か思い当たる。

「ああ、そいえば、自分から術をかけてくれっていう妙な人間が居たわね。

何、そいつもやられちゃったの？」

ふと視線を巡らすと、すぐ近くにその人間、バルザックが横たわっていた。

「あーあ、首切られちゃったんだ。

まだ動くのかな？」

パチン、ともう一度指を鳴らすアイビス。

途端にバルザックの体が壊れたカラクリ人形のように暴れだし、バタバタと甲板を転がる。

まるで絶命する間際の苦しみがくような姿に、チャイムとレイチェルは思わず目をそむけた

。

「あははっ、やーっぱもう使えないかぁ」

滑稽にすら見えるバルザックを笑い、アイビスが視線を戻すと、目の前からエアニスの姿が消えていた。

アイビスは弾かれるように空を見上げる。

「貴っ様ああああああアァッ！！！」

エアニスは剣を振り上げ、アイビスの頭上から斬りかかろうとしていた。

激昂するエアニスにアイビスはその笑みを深くする。エアニスは一瞬にして頭に血が上り我を見失っていた。彼女のした事は、バルザックへの冒涔だ。それはエアニスの中のルールで、決して許してはいけない事だった。

ガイン！！

しかし、空中でエアニスの斬撃はイビスの振るった大剣に弾かれてしまった。
視界の端にアイビスを捉えつつ、舌打ちをしてイビスに向き合う。

「邪魔 を 」

空中で壁を蹴り、イビスへ向かい飛びかかる。

「 する なァァッ！！！」

バギンッ！！

二人の剣が火花を散らせてぶつかる。

「・・・！」

イビスは、その乏しい表情を驚きの色に染める。

エアニスの剣が、イビスの大剣の半ばばで喰い込んでいたのだ。

ビギッ！

剣の亀裂が深くなる。イビスは剣を引くようにして振り払い、エアニスの間合いから離れた。
しかしエアニスはイビスに目もくれず、再びアイビスに向けて斬りかかる。

「おああああッ！！！」

咆哮を上げ駆けるエアニス。その時、アイビスの体は羽毛が風に吹かれるように空へと舞い上がった。一瞬で建物の3階程の高さに達する。しかしエアニスは諦めず、振りかぶった剣を真上のアイビスに向かい投擲する。

バシュッ！

アイビスは剣が自分の体に届く直前エアニスの投げつけた剣を素手で叩き落した。エアニスの剣は一直線に、甲板へ突き刺さる。

「！」

アイビスが目を剥く。剣を叩き落とした自分の右手が、はぜ割れていた。その傷口から血は流れず、肌と同じ色をした断面から、肌と同じ色をした破片がパラパラと零れ落ちていた。素手で剣を叩き落したとはいえ、彼女達魔族の体はそう柔には出来ていない。アイビス自身、この程度の事でこれほど大きく体を損傷した経験は無かった。

「降りて来い！！」

貴様は殺す！！！」

眼下の男は殺気を剥き出しに物凄い剣幕で叫んでいる。アイビスには何で男が怒っているのか、全く分からなかった。彼女の隣にイビスも宙に浮いてやってきた。

「・・・イビス、何なの、あの男？」

イビスは黙って自分のひび割れた剣をアイビスに見せた。彼の持つ剣は、ただの金属ではない。魔族としての自分の力を具現化させた、いわば自分の体の一部であった。アイビスはイビスの剣が傷を付けているのを初めて見た。

「分からない。

ただ、今奴を相手にする事は、エレクトラの子孫を巻き込む事になるかもしれん」

「だったら、死体達に手伝わせ・・・」

ボワッ

アイビスの言葉は途中で中断された。突如、アイビスの術下にある"生ける屍"達が、一斉に青白い炎に包まれたのだ。アイビスは呆然と眼下に転がる光景を見つめ、イビスは眩しそうに目を細めた。

「浄化の炎・・・エレクトラの子孫か」

イビスは術の正体を見抜く。

レイチェルはハンマーロッドを頭上に掲げ、力を解き放った。

甲板の上をさまよう"生ける屍"達が一斉に青い炎に包まれ、ざらざらと灰になってゆく。ただの炎の術ではない。邪悪な存在に対してのみに発動する、魔物や幽体を相手に効果を生む術である。

魔物など記録では200年以上前に魔族とともに絶滅した種族であり、必然的にそれらを相手にする術も世界から消えてしまった筈である。しかしレイチェル達エルカカの民は、それらの技術を途絶えさせずに今も伝え続けていた。

昔のレイチェルは、使う相手のいない術を伝え続ける事が何の為なのかが分からなかった。しかし、今は分かったような気がした。エルカカの民は"石"を追って旅を続けると、きっと必然的に彼らのような存在と、遭遇するのだ。

レイチェル達の周りに佇む"生ける屍"達は次々と崩れ、風に溶けてゆく。炎が消えた後に残ったのは、彼らが手にしていた銃と、僅かに燃え残った着衣のみであった。レイチェルは膝をついて、ロッドにもたれ掛かった。

「レイチェル・・・！」

チャムがレイチェルの体を支える。レイチェルにとっては文献で読んだだけで、一度も使った事の無い術だった。予想以上に魔力を消耗し、レイチェルの意識は朦朧とする。

「イビス・・・」

「何だ？」

アイビスは握った拳を震わせて言った。

「まだ船にルゴワールの間人達が残ってるわよね。そいつらみんなこの船に上げて頂戴」

アイビスは半ば向きになっていた。たかが人間にコケにされたのだ。プライドの高い彼女にとって我慢のならない事だった。

「無理をするな。

奴等を追い詰めたとしても、もし石を海にでも捨てられたら俺達でも手に負えなくなぞ。

これから先、機会は幾らでもある。

今回は引くぞ」

「でも！！」

ドグワッ！！

イビスの視線の先、アイビスの背に、巨大な火の玉が生まれた。アイビスが振り向くと、旅客船を囲んでいた戦艦の一隻が、火柱を上げて轟々と燃え上がっていた。ギゴゴゴと不気味な軋み音を上げて、ゆっくりと炎に包まれた鉄の戦艦が二つに折れて行く。

「は・・・？」

何が起こったのか分からないといった様子で、彼女は残りの戦艦を見る。

ドンッ・・・

闇夜に響く重低音が聞こえた。続いてヒュルルと空気を引き裂く音が行き過ぎ、ボガァアアン！！

更にもう1隻の戦艦が吹き飛んだ。

砲撃は最後に残った1隻のルゴワールの戦艦から放たれたものだった。

「な・・・何よこれ・・・人間共は何してんのよッ！！」

理解不能な状況に、アイビスが戸惑いの色を混じらせ叫ぶ。

「・・・奴等は4人で動いている筈だ。残りの1人が、見当たらない」

「何よ・・・その一人がああ戦艦乗っ取って、組織の船を撃ったとでも言うの！？」

八つ当たりのような叫びに、イビスは何も答えない。

「引くぞ」

再び静かに、しかし鋭い視線でアイビスを見据えてイビスは言った。

「・・・っ！」

分かったわよっ・・・！」

キッとエアニス達を睨み付け、アイビスはスカートを翻した。その姿は黒く滲むと、夜空に溶け込むようにして、消えた。その後を追うようにイビスの姿も消える。



甲板は波と風と、戦艦が燃え上がる炎の音が支配していた。

エアニスも、チャイムもレイチェルも、その場を動こうとせず、2人の魔族が消えた空を呆然と見上げていた。

「くそっ！」

エアニスは拳を壁に叩き付けた。

(また、魔族が石を狙ってるのか・・・)

2年半前の戦いが脳裏をよぎる。

あの時と同じだ。

絶望的な思いで、エアニスは暗闇の空を仰いだ。

夜が明けるまでは、まだ暫く時間があつた。

月の光を纏う者 - 2 -

<http://p.booklog.jp/book/27129>

著者：猫崎 歩

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/blah/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27129>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/27129>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ